令和4年度

へき地・複式教育

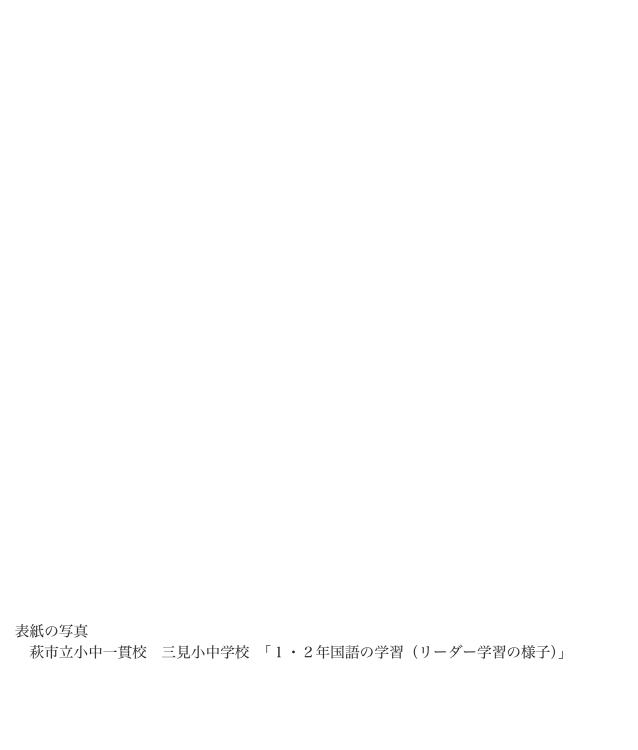


ふるさと山口に夢や誇りをもって、未来の創り手となる 子どもの育成

~子供の主体性を引き出す複式 (少人数) 指導~



山口県へき地教育振興会



第52回 山口県へき地・複式教育研究大会

山口市立さくら小学校



3・4年生授業



5・6年生授業



アトラクション



全体会



3 · 4年研究協議



5·6年研究協議



序にかえて

山口県へき地教育振興会

会 長 伊 藤 和 貴

令和4年度山口県へき地・複式教育実践研究紀要の刊行にあたり、一言御挨拶申し上げます。

平素から、それぞれの学校や地域において、へき地・複式教育の振興のために御尽力をいただいておりますことに心から感謝申し上げます。

さて、我が国において、人口が減少するとともに、少子高齢化が急速に進んでおり、離島や中山間 地域における過疎化のさらなる進行が懸念されています。

このような中、現在、県内におけるへき地指定校及び複式学級を有する小・中学校は96校で、全小・中学校数の20%を超えております。今後もこの割合はさらに増えることが予想される中で、山口県教育の発展のためには、へき地・複式学級の取組をより一層充実していかなければならないものであると認識しているところでございます。

山口県におきましては、「やまぐち型地域連携教育」を基盤として、学校だけでなく、保護者や地域と連携・協働しながら子どもたちの「未来を生き抜く力」を育む取組が進められております。そうした中、へき地・複式校では少人数の特性をプラスに生かしながら、個に応じたきめ細かな指導が実践されるとともに、地域の特色を踏まえた、一人ひとりの子どもたちが学びの主人公となって達成感を味わい、自己肯定感や自己有用感を高める活動を進めておられます。

「山口県へき地・複式教育研究大会」は、そうしたへき地指定校・複式学級の特色を活かした授業展開の充実はもとより、山口県全体の教育振興をめざし実施されるものでございまして、今年度は山口市立さくら小学校において、子どもの主体性を引き出す複式指導についての研究発表が行われたところでございます。本年も県内各地から多くの先生方に御参加いただき、へき地指定校・複式学級の一層の進化・充実に向けた研究協議を深められたことと拝察いたし、その成果を御自身の学校において実践されることにより、本県の教育がより一層充実していくよう祈念しているところでございます。

本研究紀要を編集するにあたり、県内7つのへき地教育振興会の活動の概要や実践記録等を寄稿していただきました。山口県全体のへき地・複式教育のさらなる充実と発展に繋げていくためにも、それぞれの実践を通して、地域の実情に応じた良さや課題に基づいて特色ある教育を推進し、その取組を互いに発信し合うことが大切であると考えております。

本会といたしましては、今後もへき地・複式教育の振興に努めてまいりますので、これからも御支援・ 御協力を賜りますようお願いいたします。



あいさつ

山口県教育委員会

教育長 繁 吉 健 志

山口県へき地教育振興会におかれましては、県内へき地指定校及び複式学級を有する小規模校の教育の充実と活性化のために、平素から格別の御理解と御尽力をいただいておりますことに、心から感謝を申し上げます。

県内のへき地・複式校においては、本年度は、「ふるさと山口に夢や誇りをもって、未来の創り手となる子どもの育成」~子供の主体性を引き出す複式(少人数)指導~を研究主題に掲げ、コミュニティ・スクールの仕組みを生かした地域と一体となった取組や、一人ひとりのよさを発揮する児童生徒の育成に取り組んでこられました。また、新型コロナウイルス感染症により依然として先行きが不透明な中にあっても、地域や学校の実情に応じ、1人1台端末などのICT環境や少人数の学習集団の特性を生かして取り組まれた多様な実践や、創意ある活動の集大成として「令和4年度へき地・複式教育実践研究紀要」が刊行されますことに、深甚なる敬意を表します。

さて、グローバル化の進展や技術の進歩の加速によって、社会、経済、環境など様々な分野において前例のない変化に直面している中で、教育には、子どもたちが変化に対応しながら、主体的に未来を切り拓く力を育てていくことが求められています。

このため、山口県教育委員会では「山口県教育振興基本計画」において、教育目標を「未来を拓くたくましい『やまぐちっ子』の育成」と掲げ、知・徳・体の調和のとれた教育の推進や豊かな学びを支える教育環境の充実、学校・家庭・地域が連携・協働した教育を推進しています。また、ふるさとの自然や人、伝統、文化を大切にする気持ちをもち続け、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与できる人材を育成するために、市町教育委員会並びに山口県へき地教育振興会等と連携し、諸課題の解決に向けた実践的・累積的な研究とその成果の普及を支援しているところです。

現行の学習指導要領では、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、連携及び協働により、その実現を図っていくことが重要とされています。

こうした中、山口県へき地教育振興会において、地域の特性を生かした手づくりの教育活動の推進、 多様な学習形態の工夫、一人ひとりのよさを発揮する児童生徒の育成に向けた取組を、本研究紀要に まとめ広く紹介されることは、本県教育の課題解決に迫る貴重な取組と考えております。

各学校には、引き続き、特色ある地域の学校づくりを進め、創意工夫しながら積極的な教育活動を 展開する中で、児童生徒をはじめ、保護者、地域の期待に応える学校づくりに努めていただきますよ うお願いします。

結びに、山口県へき地教育振興会のますますの御発展を祈念し、本研究紀要刊行にあたってのあい さつといたします。

り

序にかえて	山口県へき地教育振興会	会長	伊	藤	和	貴	様
あいさつ	山口県教育委員会 教育	長	繁	吉	健	志	様
○ 各地区の研究活動概要と各 岩国地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1 3 5	厚狭地 下関地 萩地区	区 ••		• • • •		9 11 13
○ 実践記録・自ら学び、かかわり合いを・ふるさとに誇りをもち、主体 ~学びをつむぎ、知を	x的に生き抜く児童の育成		立修	成小	学校	••••	15
・様々なつながりから自分(の考えを深めることができる た、認め合い深め合う学習!	児童の育 指導のエ	育成 注				19
・自分の思いや考えを明確 ~つながりを大切にし	にもち、お互いに伝え合う- た授業づくりを通して~	子どものす	育成			••••	2327
・ともに高め合い主体的に当 〜児童の実態に応じた。 ・自分の考えを広げ、深める	と学習の場の工夫~	美袮市	ī立麦	川小	学校	••••	31
~多様な考えを生みと ・自分の思いや考えを進ん	出す学習活動の工夫~ で表現できる児童の育成()	2年次)	立内	日小	学校	••••	35
~極小規模校だからご	こそできる授業の工夫を通し		「立福	賀小	学校	••••	39
〇 第52回山口県へき地・複式研究主題「子供の主体性~対話を通		指導」	3日(公	金)			
会場:山口市立さくら小学校						••••	43
あとがき 山口県へき地教育振興会 令和45 山口県へき地・複式教育大会 表						••••	49

令和4年度各地区の研究活動概要と各学校研究課題

岩国地区研究活動概要

岩国地域へき地教育振興会の該当16校(小学校15校、中学校1校)は、児童生徒の実態に即して、地域の特性や小規模校のよさを生かした特色ある教育活動を展開している。

- 1 岩国地域へき地教育振興会理事会 8名参加
 - (1) 期 日 令和4年5月9日(月)15:00~
 - (2) 会 場 岩国市役所 42会議室
 - (3) 協議内容 令和3年度事業報告及び決算報告 令和4年度役員選出、令和4年度事業計画及び予算案審議
- 2 岩国地域へき地・複式教育 夏季研修会 55名参加
 - (1) 期 日 令和4年7月25日(月)14:00~
 - (2) 会 場 岩国市周東支所 1 F 多目的ホール
 - (3) 研修内容 研究協議 <テーマ別研究協議>
 - ①かかわり合いを通して学びを深めるための指導の工夫
 - ②学びの成果と課題を把握するための振り返りの工夫
 - ③学習リーダーの育成

指導講話

講師 やまぐち総合教育支援センター 研究指導主事 伊藤 悠樹 様

- 3 岩国地域へき地・複式教育 秋季研修会(岩国地域へき地教育振興会研究指定校発表会2年次) 6 1 名参加
 - (1) 期 日 令和4年11月2日(水)13:00~16:30
 - (2) 会 場 岩国市立修成小学校
 - (3) 研修内容

研究発表 (3・4年生による発表含む)

公開授業

- ●1・2年生 指導者 敷井 幹子 教科 算数科単元名 1年「ひきざん(2)」 2年「かけ算(2)」
- ●5・6年生 指導者 藤重 拓人 教科 算数科

単元名 5年「面積」 6年「図形の拡大と縮小」

指導講話

講師 やまぐち総合教育支援センター 研究指導主事 伊藤 悠樹 様

岩国地区へき地指定校・複式学級を有する学校の研究課題

番	市町	学校名	級地学級別数	研 究 主 題		
号	114.3	, , ,	児童生徒数			
1	岩国市	小瀬小	複式 2	キャリア教育を柱とした小中一貫教育の推進 ~「12のキーワード」に示す		
1		√1.N∀√1.	8	資質・能力の育成をふまえた授業づくり ~		
2	岩国市	杭名小	複式 3	つながりを大切にし、未来を切り拓いていく子どもの育成		
			2 7	~ 主体的な学びづくりを通して ~		
3	岩国市	河内小	複式 4	つながりを大切にし、未来を切り拓いていく子どもの育成 ~ 主体的な学びづくりを通して ~		
			2 1	王体的な子のラくりを通じて		
4	岩国市	柱野小	複式 2	自ら考え学び、ともに高め合うコミュニケーション力をもつ子の育成 ~ 振り返りから、つなげる、広げる授業づくりを通して ~		
			9	派 / 及 / ル・ラ、 とない る、 為 いる 以来 とく / と 旭 し く		
5	岩国市	由西小	複式 2 10	主体的に自分の思いや考えを「伝え合う力」の育成		
6	岩国市	神東小	複式 3	主体的に自分の思いや考えを「伝え合う力」の育成		
0	石凹川	作果小	1 2	~ 他学年や地域との「つながり」を意識した授業づくり ~		
7	岩国市	そお小	複式 4	主体的・対話的で深い学びのある授業の創造		
Ĺ	71 (2) (1)	C 40/1	4 9	~ 深い学びが生まれる対話をめざして ~		
8	岩国市	川上小	複式 2	自ら学び、かかわり合いを通して、学びを深める子どもの育成 ~自分の考え、図・式・ことばで説明する算数科授業のあり方~		
			8	~ 目分の考え、凶・式・ことはじ説明 9 る鼻数科技素のあり力~		
9	岩国市	米川小	複式 4	一人ひとりの学びを深める授業の創造 ~ 基礎的・基本的な力を育む学びの場の工夫 ~		
			4 0 複式 3	2,000 2		
10	岩国市	修成小	13	自ら学び、かかわり合いを通して学びを深める子どもの育成		
			複式 3	自ら学び、かかわり合いを通して学びを深める子どもの育成		
11	岩国市	周北小	6	~ 自分の思いや考えを豊かに表現できるための手立て ~		
10	岩国市	本郷小	1級 3	- 自ら学ぶ児童生徒を育むためのつながりを生む授業づくり		
12	石国巾	华州 八	1 7	- 目り子ぶ児単生使を自むためのつなかりを生む反素つくり		
13	岩国市	岩国市 宇佐川小	2級 2	- 個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた教師の支援のあり方		
10		1 127/1/1	3			
14	岩国市	美和東小	複式 5	すべての児童生徒が意欲的に取り組み、 基礎基本を身に付ける授業づくり		
		741117184	5 7	~ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを通して ~		
15	岩国市	美和西小	複式 5	すべての児童生徒が意欲的に取り組み、 基礎基本を身に付ける授業づくり		
			5 0	 		
16	岩国市	本郷中	1級 3	- 自ら学ぶ児童生徒を育むためのつながりを生む授業づくり		
		~ \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	1 / Velt	1 /645 1	8	

[※] 学級数は特別支援学級を除く。児童数・生徒数は令和4年5月1日現在

柳井地区研究活動概要

令和4年度柳井地区へき地・複式・小規模校教育振興会は、小学校14校で組織されている。

「ふるさとに誇りをもち、主体的・協働的に学び、新しい時代を切り拓く子どもの育成」を研究主題に掲げ、各校それぞれの創意と工夫により、その解明に向け日々の研究実践を行っている。

1 活動の概要

- (1) 総 会
 - ① 期日·会場 令和4年4月22日(金) 柳井総合庁舎
 - ② 議 題 令和3年度事業報告・決算報告・監査報告 令和4年度役員選出・事業計画・予算案
- (2) 第1回理事会
 - ① 期日·会場 令和4年4月22日(金) 柳井総合庁舎(総会終了後)
 - ② 議 題 県へき振興会役員選出 県へき役員会について 研究集録
- (3) 第2回理事会
 - ① 期日·会場 令和5年2月6日(月)予定 柳井市役所
 - ② 議 題 県へき理事会等復伝 柳井地区授業研究会 成果普及について協議 本年度事業の反省 次年度計画
- (4) 令和4年度柳井地区へき地・複式・小規模校教育振興会授業研究会
- (5) 令和4年度研究成果普及(研究指定校の研究紀要を柳井地区へき地・複式校を有する全小学校及び市町教育委員会に配付)

2 授業研究会の概要

- (1) 期 日 令和4年11月24日(木)
- (2) 会 場 柳井市立日積小学校(校長 井川 真奈美)
- (3) 研究主題 ふるさとに誇りをもち、主体的に生き抜く児童の育成 ~学びをつむぎ、知を拓く授業の創造~
- (4) 内容

公開授業

学年	教科等	単元名	授業者	会場	
1 • 2 年	生活	かぞくハッピー大さくせん	柳本千菜美	1 ・ 2 年教室	
3年	国語	想像したことを伝え合おう「モチモチの木」	久永 春奈	3・4年教室	
4年	国苗	読んで考えたことを伝え合おう「ごんぎつね」	人水 春宗	3・4 牛教主	
4年	算数	面積~広さを表そう~	河野 智浩	たんぽぽ教室	
たんぽぽ学級	好 奴		切判 日伯	たがはは教主	
5・6年	総合	日積・伊陸のよりよい未来を考えよう	葉若 真樹	コミュニティ・ルーム	

② 研究協議

部会	指導助言者	司会者・記録者	会場	
低学年	光市立浅江小学校	上関町教育委員会 指導主事 桑原 泰樹	ワークスペース2	
E 1-1	教 諭 井口 康江 様	周防大島町教育委員会 指導主事 白地 太		
中学年	周南市立夜市小学校 教 諭 花岡 鉄平 様	柳井市教育委員会 指導主事 田中 章憲	図書室	
T-7-4-	柳井市立柳井小学校	平生町教育委員会 主 幹 沼田 智治	四音生	
	山口市立秋穂小学校	柳井市教育委員会 指導主事 作花 麗美		
高学年	校 長 川本 卓 様	田布施町教育委員会 課長補佐 柳本 美樹	コミュニティ・ルーム	

柳井地区へき地指定校・複式学級を有する学校の研究課題

番号	市町	学校名	級地別	学級数	ZTT. 7/12 ₹EE BET			
番万 	111 ш1	子仪名	児重		· 研究 課 題			
1	柳井市	日積小	複	4	ふるさとに誇りをもち、主体的に生き抜く児童の育成			
1	7911 开 111	口恨小	2	3	~学びをつむぎ、知を拓く授業の創造~			
2	JJ	伊陸小	複	5	ふるさとを思い 未来を切り拓く 伊陸っ子の育成			
	"	D. 1571.	3	7	~確かなかかわり合いによる 深い学びを通して~			
3	JJ	柳井南小	複	7	わかる、できる、好きになる授業を目指して			
	"	ינינדו וליומו	4	7	~多様な情報に触れ、思考を深める活動の工夫~			
4	JJ	小田小	複	7	主体的に学習に臨むことができる児童の育成			
1		, 1 H, 1	4	8	~協働的に学び合える授業づくり~			
5	周防大島町	三蒲小	複	4	学びにおいて自立する児童の育成			
		—1m,1	2	8	~ICTを効果的に活用した学び合う授業づくりを通して~			
6	IJ	沖浦小	複	4	主体的に学び、表現する力の育成(二年次)			
		1 1 1113 - 3	1	8	~自ら考え、伝え合い、関わり合う授業づくりを通して~			
7	"	城山小	複	5	自ら考え、伝え合いながら高め合い、自分の考えを深める子どもの育成			
		794	3	9	~聴き合う、学び合う授業づくりを通して~			
8	IJ	森野小	複	6	自ら考え、伝え合い、高め合う子どもの育成			
		7011111	4	2	~子どもの問いを大切にし、「話したい」「聞きたい」を引き出す授業を目指して~			
9	9 11	島中小	複	5	ステップ学習による複式授業での「主体的・対話的で深い学び」の成立			
			2	5	~ステップ学習におけるリーダー学習展開の3つの柱の実践~			
10	IJ	浮島小	3	3	離島・極小規模校における主体的・対話的で深い学びの実現			
		1 3 hard). 4	1	0	~ICTの効果的活用と体験的な活動を重視して~			
11	"	安下庄小	複	5	関わり合いを通して 学ぶ楽しさを実感できるための授業の創造			
			4	1	~複式学級における授業のよさを生かした算数科の授業づくり~			
12	上関町	祝島小	4	1	地域の教育資源を活用した活動の工夫			
			4	2	~極小規模校における効果的な地域連携活動のあり方~			
13	田布施町	城南小	複	7	学ぶことを楽しみ、確かな学力を身に付ける児童の育成			
			5	7	~児童が主体的に活動し、かかわり合いながら学びを深める授業の工夫~			
14	平生町	佐賀小	複	6	主体的・対話的で深い学びのある授業づくり			
	, i		4	7	~多様な他者とのかかわりを通して~			

周南地区研究活動概要

令和4年度周南地区小規模校教育振興会は、小学校10校で組織されている。

「様々なつながりから自分の考えを深めることができる児童の育成〜対話を中心にすえた、認め合い深め合う学習指導の工夫〜」を研究主題に掲げ、各校が地域や学校のよさを生かしながら、研究実践を進めている。

1 周南地区小規模校教育振興会総会並びに理事会

- (1) 総 会
 - ① 期 日 令和4年4月27日(水) 13:00~13:50
 - ② 内 容 前年度事業決算報告、本年度役員改選、事業計画、予算審議
- (2) 第1回理事会
 - ① 期 日 令和4年4月27日(水) 14:00~14:40
 - ② 内 容 夏期特別研修会の内容と運営について 等
- (3) 第2回理事会(会場:周南市役所共用会議室)
 - ① 期 日 令和5年2月(予定)
 - ② 内 容 本年度事業の反省、次年度事業計画等

2 令和4年度周南地区小規模校教育振興会夏期研修会

- (1) 期 日 令和4年8月10日(水) 9:40~12:00
- (2) 会 場 オンライン開催(各校)
- (3)内容
 - 開会行事

会長あいさつ 周南地区小規模校教育振興会 会長 厚東 和彦

- ② 事例紹介(各校)
- ③ 研究指定校中間発表(周南市立三丘小学校)
- ④ 講 演

【テーマ】主体的・対話的で深い学びを成立させる複式授業の展開 ~ステップ・リーダー学習による 認め合い深め合う学習展開をめざして~

【講 師】岩国市立錦清流小学校 教頭 片山 博登 様

⑤ 閉会行事

周南地区へき地指定校・複式学級を有する学校の研究課題

番号	市 町	学 坛 夕	級地別	学級数	研 究 課 題		
番万	111 т1	学 校 名	児童生徒数		切 九 珠 趣		
1	下松市	豊井小	複	6	自ら考え、ともに学び続ける子どもの育成		
1	1.47111	豆汁小	48	8	~豊井型少人数・複式の授業づくりを通して~		
2	光市	塩田小	複	4	児童の言語力を高める授業の在り方		
2)[1]1	塩田小	15	5	~相手意識や目的意識をもち、正確に伝える力の育成~		
3	光市	東荷小	複	3	学びをつなぎ、未来を拓く児童の育成		
	ارا تار ا	八 宋何八	1′	7	~ひと・もの・こととのかかわりを通し、自ら問い続ける学習~		
4	周南市	湯野小	複	6	伝え合い、深め合う児童の育成		
4	川用川	汤 到/八	29		~小規模校の特性を生かした授業づくり~		
5	周南市	士 海南山	須磨小	2	2	対話で学びを深め、豊かに表現する児童の育成	
0	川田川	須焙小	5	;	〜学んだことをアウトプットする活動を通して〜		
6	周南市	鼓南小	複	3	主体的に学びを進め、学び続ける子どもの育成		
	川田川	致田/1、	10	0	~個々のよさを生かし、表現力を伸ばす取り組み~		
7	周南市	和田小	1	3	『自分のよさを知り、自分の思い・考えを表現しよう		
,	川田川	/H H1/ 1 ,	23	3	~3C (communication, control, collaboration) 能力の育成~』		
8	周南市	三丘小	複	5	様々なつながりから自分の考えを深めることができる児童の育成		
	川田川		44		~対話を中心にすえた、認め合い深め合う学習指導の工夫~		
9	周南市 八代小	1 14.1.	複	3	主体的・対話的で深い学びを成立させる複式授業の展開		
Э		15	5	~自律的な学習展開をめざして~			
10	周南市	鹿野小	複	7	学力向上のための読解力及び表現力の育成		
10	U 周開巾 鹿 	此却刁,	5:	3	~インプットとアウトプットの一体化~		

防府地区研究活動概要

防府地区へき地・複式教育振興会は、小学校10校、中学校1校の11校(小中学校が1校)で活動している。本地区では研究主題を「へき地・複式校の特色を生かした教育活動の充実」とし、きめ細かな指導による学力の向上、社会性や表現力の育成、豊かな体験による豊かな心の育成等、各学校が地域の特色を生かしながら、様々な工夫により、その具現化に努めているところである。

1 防府地区へき地・複式教育振興会理事会・拡大役員会

- (1) 期 日 令和4年5月24日(火)
- (2) 場 所 山口市役所別館(山口市教育委員会)
- (3) 協議内容 ・ 令和3年度事業報告及び決算報告
 - · 令和 3 年度役員選出
 - ・ 令和 4 年度事業計画及び予算案審議
 - ・令和4年度防府地区へき地・複式教育振興会総会・研修会の開催について
 - ・各校の情報交換

2 防府地区へき地・複式教育振興会総会・研修会

- (1) 期 日 令和4年11月18日(金)
- (2) 場 所 山口市立さくら小学校
- (3) 研修内容
 - ○研究実践発表

[発表校] 山口市立さくら小学校

[内 容] 子供の主体性を引き出す複式(少人数)指導 ~対話を通した 深い学び合いをめざして~

- ○公開授業・分科会
 - ①国語 授業者 西村 規子 教諭 (3年:すがたをかえる大豆 4年:世界にほこる和紙) 指導助言者 池上 雅代 様 (山陽小野田市立有帆小学校校長)
 - ②国語 授業者 筒井 啓太 教諭 (5年:たずねびと 6年:やまなし) 指導助言者 松永 隆幸 様 (元萩市教育委員会複式学習指導員)

防府地区へき地指定校・複式学級を有する学校の研究課題

番号	市町	学校名	級地別 学級数 児童生徒数	研 究 課 題
1	山口市	島地小	2 1	自ら進んで考え表現できる児童の育成 (3年次)
2	九口市	串 小	2 1	主体的に学び、豊かに思いを表現する児童の育成 〜表現力を高める学習指導の工夫〜
3	山口市	八坂小	複 4 25	自分の考えをもち、自分の言葉で表現できる児童の育成 〜自分で、判断し、表現する力を育む教育活動の工夫を通して〜
4	市口山	柚野木小	2 1	主体的に学ぶ子どもの育成(3年次) ~「プログラミングの考え方を授業の中で活用する」学習を通して~
5	十口十	生雲小	復 4	自分の思いや考えを明確にもち、お互いに伝え合う子どもの育成 ~つながりを大切にした授業づくりを通して~
6	市口山	さくら小	複43 9	「子供の主体性を引き出す複式(少人数)指導」 〜対話を通した 深い学び合いをめざして〜
7	山口市	名田島小	複 6	自ら問いをもち、学びを語れる子どもの育成 〜子どもの主体的な学びを生み出すための教師の働きかけのあり方〜
8	市口山	徳 佐 小	複 6	学びを楽しみ、自らの学びを深めていく児童の育成 (3年次) 〜児童が自ら学習を進めていくための学習展開の工夫〜
9	防府市	野島小・中	3 3	小規模校の特性を生かし、一人ひとりの確かな学力の向上をめざした 指導方法の工夫
10	防府市	向 島 小	複 5	自ら学び、考え、表現することのできる児童の育成

厚狭地区研究活動概要

厚狭地区の研究主題は今年度「複式・小規模校の特性を生かした教育活動の工夫(4年次)」と設定し、会員校では各学校独自の研究主題の解明に向け研究実践を展開している。

厚狭地区へき地・複式教育研修会では、複式教育に携わる関係教職員が、当面する諸課題について協議するとともに、他地区の取組状況を参考に課題解決への具体的方策を究明することにより、厚狭地区のへき地・複式教育の一層の深化・充実を図る。

1 第1回厚狭地区へき地・複式教育振興会役員会(紙面開催)

- (1) 期 日 令和4年5月20日(金) 15:00~
- (2)会 場美祢市民会館
- (3) 協議内容 令和4年度の組織・事業計画・研修計画・予算案 等

2 厚狭地区へき地・複式教育研修会

- (1) 期日・会場 令和4年 10月27日(木) 美祢市立麦川小学校
- (2) 研修内容

麦川小学校研究主題 【ともに高め合い主体的に学ぶ児童の育成】 〜児童の実態に応じた学習の場の工夫〜

① 公開授業

学年	教 科	単 元 名	指 導 者
1・2年	国語科	1年 「かたちづくり」	教諭山邉泰江
		2年 「三角形と四角形」	174H
3 • 4年	国語科	3年 「長さ」	教諭 寺田 弘子
		4年 「面積」	教訓 分口 分子
5・6年	国語科	5年 「感想交流をして「たずねびと」を読み深	
		めよう」	教諭 北村 真男
		6年 「宮沢賢治の作品を紹介し合おう」	

② 開会行事

厚狭地区へき地・複式教育振興会会長挨拶 美祢市教育委員会 教育長 南 順子

③ 研究協議

麦川小学校による研究の概要説明、グループ別協議、協議内容発表

④ 指導講話 [指導者] 美祢市教育委員会 学校教育課 指導主事 大坪 伸彰

複式学級での充実した学びを進めていくために、1.主体的な学びを進めていくための授業づくり 2.極少人数でも学びを深めるための方策 3.柔軟な授業づくり、について話をした。1.2.では、従来の リーダー学習に加え、遠隔授業等の ICT を活用した授業づくりを取り入れることによって、複式学級や極少人数のデメリットを解消し、メリットを生かす方法について説明した。また、3.では美祢市で取り組んでいる自由進度学習の紹介をしながら、個別最適な学び・協働的な学習を一体となって 進めるための柔軟な授業づくりについての話をした。

⑤ 閉会行事

会場校校長挨拶 美祢市立麦川小学校 校長 片山 和典

厚狭地区へき地指定校・複式学級を有する学校の研究課題

番号	市町	学校名	級地別	学級数	研 究 課 題					
金万	1 1 m1	子仪名	児童生徒数		4丌 九 武 延					
1	字部市	二俣瀬小	複	4	主体的・協働的に学ぶ子どもの育成					
1	1 [[1]]	— X ₩,1,	2	5	~二俣瀬スタイルの複式授業づくり~					
2	字部市	小野小	複	5	かかわり合いを深め、ともに学び合う子どもの育成					
Ĺ	, His.11		1	9	~わかる できる すきになる 授業の創造~					
3	字部市	吉部小	複	3	【楠で育てる9年間の「学び」と「育ち」】 他者とかかわり合いながら、自ら学びを進めていく児童の育成					
	1 His.11	I	2	2	~指導と評価の一体化をめざして~					
4	字部市	万倉小	複	3	【楠で育てる9年間の「学び」と「育ち」】					
	1 112.14	79 76 19	28		~主体的に学ぶ児童の育成~					
5	山陽小	厚陽小	複	6	心を磨き、自ら向上していこうとする児童生徒の育成					
	野田市	7 1 1897 4	5	5						
6	美祢市	厚保小	複	6	「ねがい」をもち、主体的な学びによってそれを叶えていこうとする子どもの育成					
Ĺ	20114 111	7, 11: 4	3	6	〜単元構成の工夫や学習集団の形成を通して〜 					
7	美祢市	麦川小	複	3	ともに高め合い主体的に学ぶ児童の育成					
Ш			1	3	〜児童の実態に応じた学習の場の工夫〜 					
8	美袮市	於福小	複	4	対話による表現力を高め、主体的に学び続ける児童の育成					
Ш			2	2	~複式授業における間接指導の活性化を目指して~					
9	美袮市	豊田前小	複	4	聴き合い、学び合い、高め合う児童の育成					
			2	2	〜相手の話に反応する児童の姿を通して〜 					
10	美祢市	綾木小	複	3	主体的・対話的な学びを通して、生き生きと表現する子どもの育成 〜複式学級における、期待感と達成感のある授業づくりを通して〜					
Ц			1	9	~ 阪八子Wにわける、州付燃と厓队燃りある技業フトリを囲して~					
11	美祢市	淳美小	複	6	主体的・対話的な学びを通して、生き生きと表現する子どもの育成					
			5	3	~目的を明確にして、集団での学びを高める学習活動の充実~					

下関地区研究活動概要

平成11年度から「豊関地区へき地及び複式学級・少人数学級を有する学校の学校経営、学習指導及び生徒指導上の諸問題について研究協議をすることにより、小規模校教育の深化・充実を図る」ことを趣旨に取り組んでいる。平成17年2月に下関市と豊浦郡が合併したことにより、平成17年度から「下関市へき地・複式教育振興会」と名称を変更した。

平成19年度から、関係教職員の資質のさらなる向上を図ることを目的に、主要事業である「下関市へき地・複式教育研究発表会」の名称を「下関市へき地・複式教育研究協議会」と変更し、内容も公開授業と研究協議に力点を置いた研修会とした。

1 第1回下関市へき地・複式教育振興会理事会 [令和4年4月26日 (火)] (16名)

- (1) 令和4年度役員の承認について
- (2) 令和3年度会計決算報告及び監査報告について
- (3) 令和4年度事業計画について
- (4) 令和4年度会計予算案について

2 第2回下関市へき地・複式教育振興会理事会〔令和5年2月7日(火)予定〕(16名予定)

- (1) 令和4年度活動内容報告及び反省
- (2) 令和5年度下関市へき地・複式教育振興会事業計画案について
- 3 令和4年度下関市へき地・複式教育研究協議会の概要
- (1)期 日 令和4年11月11日(金)
- (2)会場下関市立内日小学校
- (3) 研究主題 自分の考えを広げ、深める児童の育成 ~多様な考えを生み出す学習活動の工夫~
- (4) 日程・内容
 - ① 公開授業

学年	教科	単元名	授業者	会場
1・2年	算数	1年「ひきざん (2)」 2年「かけ算 (2)」	久保美佐緒	1・2年 教室
3・5年	算数	3年「何倍でしょう」 5年「平均とその利用」	市原 早人	3・5年 教室

② アトラクション 「内日平家太鼓と内日小の一日(学校紹介動画)」

③ 開会行事・会長挨拶 下関市へき地・複式教育振興会 会長 児玉 典彦

④ 研究の取組紹介 発表者 下関市立内日小学校 教諭 久保 美佐緒

⑤ 研究協議 協議テーマ:多様な考えを生み出す学習指導の工夫について

(視点1) 児童の考えを広げ、深めることにつながる課題提示に

ついて

(視点2) 多様な考えを生み出す支援について

⑥ 指導講話 指導者 山口市立阿知須小学校 校長 古屋 伸浩 様

⑦ 閉会行事 会場校校長挨拶 下関市立内日小学校 校長 野﨑 誠

下関地区へき地指定校・複式学級を有する学校の研究課題

	2)	級地別	学級数	THE OWN AND DES		
	学校名	児i	童数	研究課題		
1	関西小	複	6	主体的に学ぶ子供の育成をめざして		
	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	3	3	~情報を読み解く力を育てる学習指導の工夫~		
2	本村小	複	7	進んで学ぶ子を育てる		
	\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	5	8	~ICT を効果的に活用した個別最適な学びと協働的な学びの充実~		
3	吉母小	複	2	「確かな学力を身に付け、生き生きと学ぶ子供の育成」子供の育		
			7	成〜複式学習の取組を通して自力で課題解決する力を育てる〜		
4	蓋井小	4級地	2	地域を愛し、自ら学ぶふたおいっ子の育成		
1	<u>m</u> .√1/1.		6	~思考力・判断力・表現力の育成を柱とした学びの充実を通して~		
5	複 5 学	学習に主体的に取り組み、確かな学力を身につける子どもの育成				
			1	~少人数の良さを生かし、学び合いのある授業を目指して~		
6	内日小	複	2	自分の考えを広げ、深める児童の育成		
	111111	1 1		〜多様な考えを生み出す学習活動の工夫〜		
7	楢崎小	複	5	基礎基本の力をもとに、「わかる」「できる」を実感する子供の育 成		
·	111111111111111111111111111111111111111	3 9		~思考し、学び合う力を育てる指導の工夫(算数科を中心に)~		
8	豊田下小	複	5	生き生きと活動し、主体的に学ぶ児童の育成		
	张 H 1 / 1	3	8	~見通しをもって、自ら学び進める授業をめざして~		
9	室津小	複	4	「確かな学力を身につけ、自ら学び自ら考える子どもの育成」		
	<u> </u>	2 6		~「伝え合う力」を高める学習指導の工夫~		
10	小串小	複	6	学びに向かい、確かな学力を身につける子どもの育成		
	\1.H-\1.	3 2		~複式指導の手法を取り入れた授業を通して~		
11	宇賀小	複	5	自ら学び うんと伝え合う 宇賀っ子の育成		
11	1 首/1.	2	9	〜思いや考えをつなげて広げる対話的な授業の創造〜		

萩地区研究活動概要

令和4年度の萩地区へき地・複式教育振興会の対象校は、小学校20校、中学校3校の計23校である。各校が地域の特性や小規模のよさを生かしながら、新学習指導要領に基づいた、新しいへき地・複式教育のあり方の研究実践を展開している。

1 令和4年度萩地区へき地・複式教育振興会理事会

- (1) 期 日 令和4年4月25日(月)
- (2) 場 所 萩市教育委員会
- (3) 協議内容
 - ① 令和3年度事業報告・決算報告及び会計監査報告
 - ② 令和4年度役員選出及び事業計画並びに予算審議

2 令和4年度 萩地区へき地・複式教育振興会研修会 (第1回)

萩・阿武小学校教育研究会へき地・複式教育部会合同開催

(1) 会 場 阿武町立福賀小学校

- 14名参加(会場校教職員を含む)
- (2) 研究主題 自分の思いや考えを進んで表現できる児童の育成 ~小規模校だからこそできる授業の工夫を通して~
- (3) 日 時 令和4年7月29日(金)14:00~16:00
- (4) 日 程
 - ① 研究協議 「へき地・複式校における学校・学級運営及び学習指導上の悩みの解決に向けて」
 - ② 指導講話 萩市立椿東小学校 教諭 松永 隆幸 様
 - ③ 閉会行事

3 令和4年度 萩地区へき地・複式教育振興会研修会(第2回)

萩・阿武小学校教育研究会へき地・複式教育部会合同開催

- (1) 会 場 阿武町立福賀小学校 16名参加(会場校教職員を含む)
- (2) 日 時 令和4年11月9日(水)13:45~16:30
- (3) 日 程
 - ① 研究授業 全校国語 「秋の言葉で気持ちを表そう」授業者:福賀小学校 三輪 美咲 教諭
 - ② 研究協議 「福賀小学校の研究と本時の授業について」
 - ③ 指導講話 田布施町立田布施西小学校 校長 加藤 祐之 様
 - ④ 閉会行事

4 令和4年度 萩地区へき地・複式教育振興会指定校 校内研修会 阿武町3校協働研修会合同開催

- (1) 会 場 阿武町立福賀小学校
- (2) 日 時 令和5年2月1日(水)13:30~16:30
- (3) 日 程
 - ① 研究授業 全校音楽 「未定」 授業者:福賀小学校 高橋芽生 教諭
 - ② 研究協議 「3校共通の育てたい心や力と本時の授業について」
 - ③ 指導講話 下松市立公集小学校 教育力向上指導員 教諭 矢田部 幸子 様
 - ④ 閉会行事

萩地区へき地指定校・複式学級を有する学校の研究課題

₩ □	m	****	級地別 学級	数数	TT (**) = 10 BT	
番号	市町村	学校名	児童生徒数		¥ 研究課題 研究課題	
1 萩市	地石油小	複式 5		主体的に学び、成長する児童・生徒の育成		
不久刊		越ヶ浜小	34		~小・中一貫教育による学力向上への取組を通して~	
2 "	三見小	複式 3		自分の思いや考えを表現し、学びを深め合う児童生徒の育成		
		二元小	21		~ICTを有効に活用した授業づくり~	
2 "	大井小	複式 3		伝え合い、深め合う授業づくり		
3 " 大井/		八开小	24		~伝える力と反応する力の向上を通して~	
4 "	大島小	2 3		ICT環境を活用して主体的に学習を深める児童生徒の育成		
	,,	八局小	20		~1人1台の端末を効果的に使った学習活動を通して~	
5	//	見島小	4 2		夢の実現に向けて自ら表現しようとする子どもの育成(3年次)	
			3		~ICT機器を活用した思考力・判断力を育む学習の実現~	
6	//	川上小	複式 4		主体的・対話的で深い学びを実現する児童生徒の育成	
			21		~学びを深め合い、まとめるカ~	
7	"	小川小	2 3		自他の思いや考えを大切にし、進んで表現する子どもの育成	
		43.31143.	19		~複式指導における「説明力」を高める授業づくり~	
8	//	むつみ小	1 5		主体的・対話的で深い学びをめざした教育活動の実践	
		0 207.1	24		~ICT機器の活用を通して~	
9	//	明末小	複式 3		自他のよさや違いを認め合い、ともに高め合う心豊かな児童生徒の育成	
		23,414.3	19		~人権を尊重した学び合い・関わり合いを通して~	
10	//	佐々並小	複式 4		自他のよさや違いを認め合い、ともに高め合う心豊かな児童の育成	
		12 12 3	14		~人権を尊重した学び合い・関わり合いを通して~	
11	//	育英小	複式 6		課題への見通しをもち、自ら学ぶ児童の育成(2年次)	
			47		~読解力を高める指導を通して~	
12	//	多磨小	複式 6		かかわりの中で、自ら学び続ける子どもの育成	
			49		~ 『個別最適な学び』と『協働的な学び』の充実した授業を目指して~	
13	//	福栄小	複式 6		豊かな心を育む道徳教育	
			32		~心を耕すための指導の工夫~	
14	//	大島中	2 3		ICT環境を活用して主体的に学習を深める児童生徒の育成	
			13		~1人1台の端末を効果的に使った学習活動を通して~	
15	//	見島中	4 1		夢の実現に向けて自ら表現しようとする子どもの育成(3年次)	
			3		~ICT機器を活用した思考力・判断力を育む学習の実現~	
16	//	むつみ中	2 3		主体的・対話的で深い学びをめざした教育活動の実践	
			17		~豊かなコミュニケーションを支える授業改善を通して~	
17	長門市	通小	複式 3		主体的に学び、仲間と共に高め合う児童の育成	
			14		〜小規模校のよさを生かした授業づくりの工夫〜 ・	
18	"	俵山小	複式 6		主体的・対話的な学びを支援する授業の創造	
		神田小	31 ★+ 0		~相手意識をもって、進んで伝え合う場の工夫~ ************************************	
19	"		複式 3		主体的な学びにつながる豊かな自己表現力の育成	
		向津具小	10		~問いや思いをもってつなげる学びへの手立て~	
20	//		1 4		主体的に学ぶ子どもの育成	
		向陽小	14 複式 7		〜自分の考えをもち、表現する力を高める授業を通して〜 「深い学び」の実現をめざした授業の創造	
21	"		_ 複式 7 			
<u> </u>					〜国語科における対話的な学びの充実をを通して〜 /対話\のちる授業づく!!	
22	"	浅田小	<u>複式</u> 8		⟨対話⟩のある授業づくり ~思考が動き出す発問の工夫を通して~	
			2 4			
23	阿武町	福賀小	9		自分の思いや考えを進んで表現できる児童の育成 ~小規模校だからこそできる授業の工夫を通して~	
			9		- が民人になってくての人人の上人で通じて	

実践記録

自ら学び、かかわり合いを通して学びを深める子どもの育成

岩国市立修成小学校

1 はじめに

本校は岩国市の西端に位置し、運動場の真ん中には学校のシンボルとなっている大きな楠が穏やかに木陰を作る、全校児童13名(1年生3名、2年生2名、3年生2名、4年生3名、5年生2名、6年生1名)の学校である。「ふるさとを愛し、心豊かにたくましく生き抜く児童生徒の育成」を学校教育目標に掲げ、「考える子、やさしい子、がんばる子」の3つの児童像を柱として調和のとれた人間形成を目指している。コミュニティ・スクールの仕組みを生かした取組を通して、農業体験や学校応援団活動等、地域の方とふれあう機会は多く、様々な人との温かいかかわりによって児童は育まれている。

2 研究主題

これまでの研究においては、授業の流れやリーダー学習などの授業スタイルを校内で統一し、児童が同じ流れの中で負担なく複式授業に取り組むことができるように形を整えるとともに、話合い活動を活性化させるため、対話が生まれるような環境づくりに取り組んだ。それにより一人学び・共学びという学習活動が効果的に行われるようになってきた。昨年度は特に「ふり返り」に焦点を当て、ふり返りの視点の統一・ふり返りカードの蓄積により、児童が自身の学びの成果と課題を把握することで、より主体的に学びに向かう力を身に付けることを目指し取組を行った。ふり返りが充実してきた一方で、それを効果的に活用し次の学びにつなげるということは課題が残る。また、かかわり合いを通して学びを深めるために、友達とのかかわりを通して自分の学びを深めたり、共に学ぶことで課題解決につなげたりすることができるなど、児童が友達と共に学ぶ良さを実感することが必要である。

そこで今年度は、二つの視点「学びに向かう力の向上」「深い学びにつながるかかわり合い」をもとにした研究を継続し、特に、かかわり合いの面においては、児童がかかわり合いを通した学習の良さを感じ、共に学ぶ力を育てることができるよう研究を深めていくこととした。この研究を通して、児童が主体的に社会・地域とかかわり、そのかかわり合いの良さを感じながら、自分たち自身で学びを深めることができるような学習・活動を目指したい。

(研究仮説)

複式授業や様々な活動の場において、児童が自分自身の学びの成果と課題を把握することによって、主体的に学ぶ力が育まれるのではないか。

また、教材や地域、友達と共に学ぶ力を育てることで、より深い学びを獲得することができるのではないか。

3 研究の内容

研究仮説をもとに、以下の二つの研究の視点とともに、具体的な手立て・内容を設定 し、授業研究や教育活動全体を通して検証していくこととした。

研究の視点① 学びに向かう力の向上 視点②深い学びにつながるかかわり合い

(研究内容)

	授業研究	教育活動全体 (特活/総合/地域・小小連携教育)	
視	○めあての設定	※「活動の見通しカード」を通して	
点①	・・・「児童の目的意識」「学びのつなが		
⊕学びに向かう力の	り」が生かせるめあて	○活動の見通し	
	○ふり返りの活用	・・・めあて→ふり返り	
	・・・自身の学びの達成具合を捉え、次	活動全体を関連付け、見通す	
	の学びにつなげる	・・・児童自身が活動の方向性を考	
	○自己評価アンケートの実施	える	
	・・・「学び方」の視点からのふり返り	・・・教師が児童と活動のゴールを	
	より良い「学び方」を意識	共有	
視	○対話の力の向上		
点② 深い学びにつな	・・・一往復半の対話の実践、問い返し	○様々な活動での発信の場の設定	
	(質問) の習慣化	・・・委員会活動や行事等、全校の場	
	○多様なものの見方・考え方につながる	での発言機会を増やす	
	教師の発問・問い返し	○連携教育を生かしたかかわり合い	
	○「共学び」に焦点を当てたふり返り・・・	の場の設定	
なが	かかわり合いを通した学習の		
る	良さを児童自身が感じる		

4 具体的な取組(授業研究における取組)

(1) 授業研究 1・2年 算数 1年「ひきざん(2)」 2年「かけ算(2)」



1年生は繰り下がりのあるひき算の計算の仕方を、ブロックを用いて考える学習を行った。一人学びの際にはブロックの操作活動を通して13から9をひく方法を考えた。共学びでは自分が考えた方法をブロックを操作しながら説明をした。友達の発表に対して承認したり、同意をしたり、感想を述べたりして一往復半の対話を心がけた。本時は児童の考えが似通っていたので質問は出なかったのでバーチャルクラスメイトを登場させ、児童とは

異なる方法を提示した。その後の話合いを通して、「はやくて・かんたん・せいかくに」ひく方法(10からまとめて9をひく)を見つけることができた。

2年生は7の段の九九を用いて適用題を解く学習に取り組んだ。基準量が後に出てくる問題では児童が2人とも正答を導き出したので、バーチャルクラスメイトを登場させ、誤答を提示した。2つの式を比較することで、文章に立ち返ったり、自分たちが描いた図を



見直したりして、1つ分の数に目を向けて、話合いを通して正しいかけ算の式を導き出すことができた。

友達の発表に対して的確な質疑応答をする力は十分身に付いているとは言えないが、 今後も多様な考えに触れさせ、一往復半の対話を通して学びを深めていけるようにした い。

(2) 授業研究 3・4年 算数 3年「一万をこえる数」 4年「一億をこえる数」

3年では、数を10倍するとどうなるかを学習した。導入時に既習の 10×10 、1桁×10の計算を児童から引き出しておいたことで、「10倍すると①右端に0が1つつく②位が1つ上がる」というまとめが、既習の計算にも当てはまることを確認できた。また、ふり返りにおいて、「10倍したら0が1つつくということをたよりにすれば、もっと大きい数でも計算できそうだ」という感想が見られた。この



ように児童自身が既習内容や今後の学習に思考をつなげる経験を積むことで、学びの良 さを感じ、学習に対する意欲を高めることができると感じた。



4年では、一人学びで生じた意見の違いを話し合うことで、自分達で正しい答えにたどり着くことができた。共学びにおいて、一人学びで「困ったこと」「悩んでいること」を含めて発表し、それを説明し合ったり議論したりして解決していく経験を積むことで、一人学び→共学びという学習過程を経て自分の中での理解が深まることを実感することができた。ま

た、説明の手順を一人学びの前に示しておくことで、その手順に沿って各児童がミニボードに説明を書き、共学びでは焦点を絞った話合いを行うことができた。

ふり返りを普段から2学年一緒に行っているが、特に今回のように同内容異単元の場合には、学年間の学習のつながりに目を向けるために効果的であった。

(3)授業研究 5・6年 算数 5年「面積」 6年「図形の拡大と縮小」

5年では、「これまで学習した面積の公式をつかって、台形の面積の求め方を考えよう」というめあてで学習を進めた。本時の学びをスムーズにするため、既習事項であるさまざまな面積の求め方を児童の見える場所に掲示するようにした。本時でも掲示を確認して、既習内容をふり返りながら学習を進める様子が見られた。





また、一方の児童が発言した 内容について「〇〇さんの考えってどういうことかな。」と、 もう一方の児童に問い返しを行い児童に説明させることで、 学びを深めることができた。

6年では、「拡大図と縮図の関係になっている図形を見つけ、そのわけを説明しよう」というめあてで学習を進めた。 本単元では、単元を通しておさえるポイント(対応する角

の大きさと辺の長さの比) について着目して考える場面を意識的に取り入れたり声かけ

を行ったりすることで、課題解決の視点をもてるようにした。その結果、本時でも自力で課題解決の視点を見つけ、課題に取り組む姿が見られた。

また、ふり返りの場面では、「なぜ拡大と縮小の関係になっているのか」について5年生に説明することで、相手に納得してもらうために自らの説明をより整理して伝えようとすることができた。

今後も、学びのつながりについて意識を置き、単元を見通して学習を進めていきたい。

5 成果と課題

(1)成果

視点①学びに向かう力の向上 について

- ・めあての設定による学習の見通し・・・授業導入時に前時の学習との違いを話し合い、めあてを設定することで、「何を学ぶのか」が児童の中で明確になり、見通しをもって学習できるようになった。
- ・ふり返りの充実・・・ふり返りカードを蓄積し、自身の学びの状況を把握すること で、学習に対して主体的・意欲的に取り組む様子が児童に見られるようになった。
- ・活動の見通し・・・特別活動や総合的な学習などにおいて、活動のめあてや毎時の活動のふり返りを記入するカードを取り入れた。それぞれの活動で大切にしたいキーワードが明確になることにより、児童が活動の見通しをもち、活動全体に一貫性が見られるようになった。

視点②深い学びにつながるかかわり合い について

- ・友達とかかわり学ぶ良さを生かす・・・毎月「共学びについてのふり返り」を行い、 友達とかかわり学ぶことの良さを感じることで、学習活動全体の意欲につながってい た。また、相手に納得してもらうために自分の内言を整理し、相手にわかりやすく語 るため外言化することが、より深い思考につながった。
- ・連携教育を通じた多様なかかわり合い・・・多様な相手とかかわり学ぶ場をもつことで、相手に応じて伝え方を工夫したり、かかわり方を考えたりするなど、より客観的に、自身のかかわりや伝え方について、考えられるようになった。

(2)課題

|視点①学びに向かう力の向上 について|

・ふり返りの活用・・・算数科のふり返りカードを活用し、復習や自主学習につなげる とともに、特別活動におけるふり返りも、同じように学級で共有・フィードバックす る機会をもちたい。

視点②深い学びにつながるかかわり合い について

・児童同士での問い返し・・・多様な見方・考え方につながる問い返しを、教師が行う 実践を重ねてきたが、主体的に学習を深めていけるよう、児童同士でも問い返しを習 慣化し、話合いを深められるようにしていきたい。

6 おわりに

地域の協力をはじめ、研究協力校である川上小学校、周北小学校の支援により、実りある研究を行うことができた。今後も教育活動全体を通して、児童が自分自身で学びを深める姿を思い描き、研究を継続していきたい。そして、児童が友達と共に学ぶ楽しさを感じ、自分たちの複式学習に自信をもつことができるような授業作りを目指したい。

ふるさとに誇りをもち、主体的に生き抜く児童の育成

~学びをつむぎ、知を拓く授業の創造~

柳井市立日積小学校

1 はじめに

本校は、柳井市北部に位置し、豊かな自然や人情あふれる人々に囲まれた、全校児童23名、複式学級3学級、特別支援学級1学級の小規模校である。学校教育目標を「ふるさとに誇りをもち、心豊かで主体的に生き抜く日積っ子の育成」と掲げ、めざす児童像を「考える子、思いやりのある子、実践する子」とし、豊かな人間形成をめざしている。その具現化に向けて、学校・家庭・地域の絆を深め、協働体制を強化し、教育活動の充実を図りながら、共に子どもたちの学びを支えている。

2 研究主題

本校は、素直な子どもが多く、課題に対して意欲的に取り組むことができる。また、 友達や地域の人々等とのかかわりの中で、進んで探究し、自分の考えを伝えようとする 姿が見られるようになってきている。しかし、書くことにより表現したり、他者と交流 しながら考えを広げ深めたりすることについては、課題が感じられる。また、学習した ことを、次の学習や生活場面に生かしていく力を身に付けることも必要であると考える。 昨年度より、研究主題を「ふるさとに誇りをもち、主体的に生き抜く児童の育成」と 設定し、研究に取り組んでいる。日積地域の教育的資源、少人数ならではのよさを生か した教育活動を展開することで、子どもたちが、ふるさとを見つめ、学びを確かなもの として、主体的に生きていくことを期待して、実践を重ねている。これまでの成果と課 題を踏まえ、今年度は、「学びをつむぎ、知を拓く授業の創造」と副主題を設定し、取り 組むこととした。直面する様々な場面において、自分の経験や知識・技能を活用すると ともに、他者と協働して問題を解決していくことが大切である。多様な見方や考え方を もつ他者とかかわる中で、自らの考えを振り返り、学びを再構築していくことのできる 子どもを育てていきたい。そして、自ら知を拓き、新たな方策を見付けて課題解決に向 かう力、実生活につなげていく力を育んでいきたいと考えた。そこで、子どもたちが他 者と考えを語り合う「学びをつむぐ」場を工夫すること、子ども一人ひとりが学びの世 界に浸り、自己省察しながら「知を拓く」ことのできる場を工夫することに重点を置き、 授業づくりを進めることとした。

【研究仮説】 子どもが課題解決に向かう過程において、他者と学びをつむぎ、自ら知を 拓いていくための働きかけを工夫することができれば、ふるさとを見つめ、 主体的に生き抜く力を伸ばしていけるのではないか。

3 研究の内容

研究仮説のもと、以下の4つの研究の視点を基に、授業研究や教育活動全体を通して 検証していくこととした。

- (1) 学び合いにつながる授業づくり
 - ・学習規律の徹底、学習環境の整備
 - ・問題解決的、探究的な学習過程の工夫

- (2)「学びをつむぎ、知を拓く」授業の工夫
 - ・「学びをつむぐ」場の工夫
 - ・学び合いの活性化のために「視点」提示 の工夫
 - ・発問の工夫
 - 「知を拓く」ことにつながる振り返りの 充実
- (3) 複式学級の特性を生かした授業の創造
 - 指導計画作成、教師の支援等の工夫
 - ・ガイドとフォロワーの協働的学習の工夫
 - ・複式学習や個人差に対応した I C T の効果的な活用
- (4) ふるさとへの思いを育む教育活動
 - ・目的にそった地域人材や地域資源の活用
 - ・学校・地域連携カリキュラムを基にした 授業づくりの工夫
 - ・単元のつながりや他教科等との関連を図った授業構想

	ステップ1	ステップ2	ステップ3
「つむぐ」 地面で めざす姿	○自ら考えをもち進んで伝えたり、友達の 第言に関心をもって聞いたりしながら、 謎をつないでいく。		○執着と自分の考えを関連付けたり、複数の形 点から見つめたりしながら、新たな考えを報発 していく。
「学びをつむぐ」 子どもの検和 【M】	・考ま物でも「たいした」 ・電影性がも 「なぜのかっから」 「概要を対する 「たっこのとのかか」 「概定をかな」 「かたのこで・・・」 「おした。」 「かたのこで・・・」 「おした。」 「かためこで・・・」 「おり切るそから ・・・」 「おり切るそから ・・・・」 「ホースリー・・・」 「ボースリー・・・」 「ボースリー・・・・」 「ボースリー・・・・」	・場合する 「内面型と一切人は、・・と世界でいる」 「検索」「「使でいることは〜」 「検索」「「使でいることは〜」 「物にない」 ・・多様する 「たった」 ・・「たった」 ・・「たった」 ・「おった」 ・「おった」 ・「はった」 ・「はっ	** 意見、解集、計算制等の保ひ など ** なげる 「~から考えると、・・・」 ・強化する 「Oだけでなく、△と言えるので・・・」
数類の個音かけ (Sd)		女視点を変える	☆複数の視点から考える(回消) 南古丁・355子・日分(約円) 双立の思い・知識の力の思い・ 自分の思い。

		「知を拓く」場の工夫		
	ステップ1	ステップ2	ステップ3	
「知を招く」場面 でめざす数	○考えを自分なりの言葉で表す。	○他者の考え方、他の視点などとつなげて、自 分の考えを表す。	○経々な考え方、複数の視点を関連付けて、新た に見出したことを表す。○自己を見つめ直し、更新した考えを要す。	
「まとめ」 +どもの様相 【例】		(本地の研題に対する考え・地論) ・キーケードを出し合う ・キーケードや学習用語等をつなげて、整理する		
「振り返り」 子どちの 信相 【側】	部からたといてきたこと ・適温をか 「か心思った」 ・学が全点をはする 「かいなかった」 ・一点が変形がない。 ・台点の変形を実践する 「小がたきんことなった」 ・一がない。 ・台点の変形を実践する 「小がたきんことなった」 ・他の考えからがようかた。	・簡単をもつ 下から、・・・と回った」 ・ 学生を発化する ・ サルス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	・簡単を20 「自由することを3人」 等のか・・・を3人」 等のか・・・を3人」 ・「はないかに、一年に月間からしました」 ・「おおした」と、「はないか、演は・・した」 ・自己の宣音を書きる。 「自由する」と、「はないか」。 ・総合の考えとつかげる。 「これないか」と、「はないか」。 ・「はないか」と、「はないか」。 ・「はないか」と、「はないか」。 ・「はないか」と、「はないか」。 ・「はないか」と、「はないか」。 ・「はないか」と、「はないか」。 ・「はないか。 ・「はないか。 ・「はないか。 ・「ない	
	ごれからしてみたいこと ・新たな疑問をもつ 「一はどうだろうか」 ・未来へつなげる 「実は一をしたい」	・新たな疑問をもつ 「~は~だけど・・・はどうだろつか」 ・未来へつなげる 「~だから、これから・・・したり」	・新たな疑問をもつ 「~はどうか、・・・の方法で数へだい」 ・未来へつなげる 「~は、~じ、・・・のように使えそうだ」	

「学びをつむぐ」「知を拓く」場の工夫 発達段階に応じてまとめた表(ステップ1~3)

4 具体的な取組

(1) 学び合いにつながる授業づくり

子どもたちが主体的に友達と関わり、学びをつむいでいくための土台として、学習 規律の徹底や環境の整備を行い、落ち着いた学習環境をつくることが大切である。そ こで、学習規律表を作成し全教職員で共通理解をして取り組んだり、ユニバーサルデ ザインに基づいた教室掲示を考え、統一を図ったりしてきた。そうすることで、静か な環境で、落ち着いて学習を始める子どもの姿が見られた。

また、子どもたちが思わずやってみたくなるような、そして、友達と学びをつむいでいきたくなるような、問題解決的、探究的な学習の設定も工夫してきた。例えば、

単元の始めに、子どもたちが「なぜだろう。」「調べてみたい。」と思えるような、実生活と関わりのある課題を投げ掛けることで、「こうなるのではないかな。」と予想を立てたり、「こうしたらよいのではないかな。」と改善案を考えたりする生き生きとした姿が見られた。単元を通して、課題意識が連続発展していくような学習の流れを工夫することで、学び合いの必要感をもたせていきたい。

(2)「学びをつむぎ、知を拓く」授業の工夫

子どもたちが、課題に対する考えを他者と伝え合い、 学びを深めていくことができるよう「学びをつむぐ」場 を工夫している。その中で、子どもたちが、どのように 他者と考えを交流し学びを深めていくとよいかわかるよ うに、つむぐ言葉を可視化し、整理していくようにした。 子どもから出た言葉を価値付け、ボードに書き加えてい



課題意識をもって調べている様子



「学びをつむぐ」言葉の掲示

くことで、意欲的につむぐ言葉を活用しようとする子どもたちの姿が見られた。また、 つむぐ言葉を活用していく中で、自分の考えと友達の考えを比べたり、資料や自分の 経験などから得た根拠を基に伝え合ったりしながら、学びをつむいでいく姿も見られ るようになってきている。同時に、子どもたちが主体的に「学びをつむぐ」ことがで きるよう、考えの表現方法を工夫した。子どもたちは、カルタやポップ、短冊などに

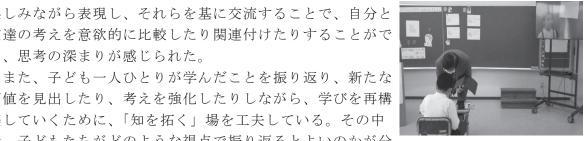
楽しみながら表現し、それらを基に交流することで、自分と 友達の考えを意欲的に比較したり関連付けたりすることがで き、思考の深まりが感じられた。

価値を見出したり、考えを強化したりしながら、学びを再構 築していくために、「知を拓く」場を工夫している。その中 で、子どもたちがどのような視点で振り返るとよいのかが分 かるように、3つの視点「かかわりから気付いたこと」「分かっ たこと・できたこと」「これからしてみたいこと」を提示し、学 習のねらいに応じて振り返ることができるようにした。その際、 子どもから出された言葉を取り上げ、視点ごとに整理して掲示し ておくことで他の学習においても、振り返りをする際の手掛かり となった。そうすることで、友達や地域の方との関わりから自分 の学びを深めたり、生活や学習につなげたりする意欲的な言葉が 子どもから出てくるようになった。「知を拓く」ことが、子ども 一人ひとりにとって、真の学びとなるよう、一層の工夫をしたい。

(3) 複式学級の特性を生かした授業の創造

教科等の特性を踏まえて、複式で行う教科と、A年次と B年次に分けて2年間を見通して実施する学習を教育課程 に位置付けている。そうすることで、より効果的・効率的 に学習を進めることができると考える。

複式学級での授業に向けては、「ガイド学習の手引き」や 「日積小ガイド学習系統表」を作成し、それらを活用しな がら取り組んできた。ガイド役の子どもが「学習の進め方」 (手引き)を活用し、流れに沿って進行することで、子ど もたちが協働的に学習することができるようになってきて いる。発問を精選し、1つの問いに対して子どもたちが探 究していけるような授業づくりを行い、教師が間接的に見 守り、適切な場で支援ができる授業をめざしていきたい。 また、小規模校の特性を活かし、近隣の小学校とリモート で学習を行っている。子どもたちは、新たな視点をもち、 考えを広げることができた。ICTを効果的に活用し、日 常的に交流学習の場を設定し、学びの充実を図りたい。



友達の考えを動画で提示



振り返りの視点の提示



複式授業で考えを伝え合う様子



近隣校と ICT を活用しての交流

(4) ふるさとへの思いを育む教育活動

昨年度に引き続き、学校運営協議会委員、学校応援団、教職員で、「めざす子どもの 姿」について話し合い、学校・地域連携カリキュラムを基に、生活科・総合的な学習 の時間の授業づくりを行っている。授業のねらいに沿って、活用できそうな地域資源 や人材について交流したり、学習活動について吟味したりしながら単元構成を行ったことで、研究主題に迫る授業実践へとつなげることができた。また、実際の授業の際にも多くの方が関わってくださった。ゲストティーチャーとして、地域の特色や実態、思いや願いを話していただくことで、子どもたちは、課題を現実的に捉え、その解決のために主体的に取り組んでいく姿が見られた。子ども自ら、どんなことができるか考え、実践していくことができるよう促していきたい。



授業について語り合う様子(熟議)



地域の人の案内で現地調査



地域の人との意見交流の様子

5 成果と課題

(1) 成果

- ・視点1「学び合いにつながる授業づくり」として、学習規律の徹底や環境の整備に 取り組むことにより、子どもが落ち着いて学習することができた。また、問題解決 的な学習を設定することで、主体的に学びに向かう姿が見られるようになってきた。
- ・視点2「『学びをつむぎ、知を拓く』授業の工夫」として、「学びをつむぐ」場面、「知を拓く」場面で、めざす子どもの姿をステップ1・2・3の段階に分けて表に整理し、それを基に取り組んできた。また、発問や手立てを工夫することで、自他の考えを比較したり関連付けたりしながら考えを深める姿が見られた。
- ・視点3「複式学級の特性を生かした授業の創造」として、近隣校とのオンラインによる合同学習を取り入れたことは、学びの充実のために効果的であった。
- ・視点4「ふるさとへの思いを育む教育活動」として、地域の教育的資源を生かし、 地域と共に授業づくりを行ったことで、学習の充実につながった。また、日頃から 地域と関わることで、子どもたちは、地域を身近に感じ親しみをもつことができた。

(2) 課題

- ・「学びをつむぐ」場を学習過程に効果的に取り入れ、学習のねらいに応じて、手立て をより工夫していく必要がある。また、「知を拓く」場の充実も図っていきたい。
- ・子どもが学び方を習得し、自ら選択し主体的に学んでいくための工夫をしたい。
- ・地域の人々への感謝の気持ちをもって自分たちにできることを考え、実践していくことが大切である。ふるさとに誇りをもち、地域で活躍する姿を求めていきたい。

6 おわりに

これまで、研究主題である「ふるさとに誇りをもち、主体的に生き抜く児童の育成」をめざして取り組んできた。子どものたちの成長を感じて喜び、地域の方とともに授業つくる楽しさを感じて感激し、一方で、なかなか思い通りに進めることができないもどかしさを感じながら、一歩一歩進んできた。これからも、"小規模校だからこそ!""小規模校ならでは!"のよさ、そして"授業づくりの楽しさ!"を味わいながら、楽しく実践を重ね、「ひづみんスタイル」を発信していきたいと考えている。

様々なつながりから自分の考えを深めることができる児童の育成

~対話を中心にすえた、認め合い深め合う学習指導の工夫~

周南市立三丘小学校

1 はじめに

本校は、周南市東部、清流島田川の側に位置し、山や田畑に囲まれた自然豊かな学校である。全校児童は、44名(1・2年生…6名ずつの単式学級、3・4年生…16名の複式学級、5・6年生…16名の複式学級)である。学校目標に「ふるさとに学び、夢の実現をめざす三丘っ子の育成~学校・家庭・地域がつながり、活力ある教育の推進~」を掲げて、特に、農業(芋、麦、ナス、米)、伝統(人形浄瑠璃、論語朗唱)、福祉(高齢者福祉、防災学習)に関する教育活動において、地域と連携した特色ある教育活動を展開している。

2 研究主題

本校の児童には、人前で発表したり発言したりする機会に恵まれているため、積極的に発表する児童が多いこと、上学年が下学年を気遣い、優しくお世話をすること、学習に対して前向きに取り組む児童が多いことなどの良さがある。しかし、なかなか自分の意見がもてなかったり書けなかったりする児童がいること、学力の個人差がとても大きいこと、同じ人間関係の中で馴れ合いが生まれ、言葉が足りなくても意図をくみとってもらえるため、意見を伝えたり説明したりする力が不十分なことなどの課題が見られる。

そこで、研究主題を「様々なつながりから自分の考えを深めることができる児童の育成〜対話を中心にすえた、認め合い深め合う学習指導の工夫〜」とし、対話を通して深め合う学習指導を中心課題として、研修を進めている。

研究仮説を次のように設定した。

(研修仮説)

少人数の良さを生かし、少人数であるがゆえに生じる課題に対応しながら、ICTの効果的な活用、課題設定や学習形態・まとめや振り返りの工夫を行うことで、様々なつながりから、自分の考えを深めることができる児童が育つのではないか。

「様々なつながり」とは、次のようなことが挙げられる。

(1) つなげる (つかむ) <u>既習事項や生活経験とつなげた</u>課題設定の充実 【主体的な学び】

(2) つながる <u>多様な他者との学び合い</u>による対話の充実【対話的な学び】

(考える) ①一人学び・・・教材・事象(もの・こと)とつながる

(深める) ②共学び・・・(ひと) とつながる 対話がつながる

(3) つなぐ (まとめる) 学びを再考し、自らの学びを確かなものにする場の充実 (ふりかえる) 次時の学習や生活につなごうとする場の充実

【深い学び】

3 研究の内容

- (1) 互いの考えを認め、深める授業づくり
 - ①既習事項や生活経験とつなげた課題設定 ②1往復半のやりとりのある対話学習 ③めあてと整合性のあるまとめの充実 ④振り返り(カード)の充実
- (2) 授業研究による授業改善
- (3) リーダー学習を意識した授業づくり
- (4) スキルアップタイムによる基礎学力の向上
 - ①タブレット活用学習 ②基礎基本・応用発展問題
 - ③読書・読み聞かせ ④フリートーク
- (5) 話し合う場、発表する場の充実
 - ①学級活動・委員会によるイベント活動・たてわり班活動の充実
 - ②地域の特性を生かした学習

4 具体的な取組

(1) 互いの考えを認め、深める授業づくり

①既習事項や生活経験とつなげた課題設定

児童が課題に対して興味や関心をもち、主体的に課題解決に取り組み、学びを深めていくことができるように、授業の導入における「課題設定」について、学習内容を 既習事項や生活経験とつないだり、新たな教材や事象の提示方法を工夫したりすると ともに、児童が考えたくなったり、話し合いたくなったりするような発問の工夫をした。

②1往復半のやりとりのある対話学習

互いの考えを出し合い学び合う対話の中で、ICTを効果的に活用することで、自分の考えと他者の考えを共有・比較・分析しやすくし、対話が重なり、多様な考え方ができるようにした。



③めあてと整合性のあるまとめの充実

授業での学びを確かなものにするために、自らの学びを価値づけて自覚したり、共 学びによって生まれた新たな考えを整理してまとめたりするなどの場面を充実させた。 まとめの書かせ方については、穴埋め、書き出し指定、キーワード指定、フリー記述等、 児童自身の文章で書けるようにすることを目標に、段階を追って進めている。

④振り返り (カード) の充実

授業終末の振り返りについては、視点を明確に与えるようにした。また、記号やイラストによる三段階自己評価や文章記述ができるようなカードの工夫にも取り組んだ。

(2)授業研究による授業改善

授業研究については、国語科に絞り、上記の課題を視野に入れた授業の提案を行った。その際、以下の3つの視点を踏まえた授業づくりを行うものとした。

- 視点① 対話の必然性を生み出す課題設定
- 視点② ICTを活用した深め合う対話
- 視点③ 自己の学びを再構築するまとめや振り返り

《3年「調べて書こう、わたしのレポート」4年「みんなで新聞を作ろう」》

視点① 対話の必然性を生み出す課題設定

3・4年生は、レポートや新聞の特長を見付け、学年ごとに話し合って、学習計画を

たてた。学習計画を教室内に掲示し、学習の記録を付け加えていくことで、次に何を考えていけばよいか、子ども達は見通しをもって取り組むことができた。子ども達一人一人が学習意欲を高め、主体的に学習する姿が多く見られた。



視点② ICT を活用した深め合う対話



レポートや新聞の記事に取り上げたい物を写真に撮って選択をし、選んだ物を友達に紹介をしたり、前時の板書や資料を提示しながら話合いを行ったりすることができたので、個、ペア、グループ活動をスムーズに行うことができた。また、大型DPへ、児童の考えや個々の資料を提示して発表をすることで、みんなで個やグループの意見を共有し、意見や感想を述べ合うこともできた。

視点③ 自己の学びを再構築するまとめや振り返り

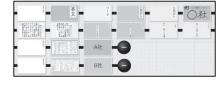
毎時間の終末に同じ形式の振り返りカードを使った。「本時のめあて」「まとめ・感想」「次時にがんばること」を記入した。学習計画を立てて掲示したことで見通しをもつことができ、児童は本時とのつながりを考えて次時にがんばりたいことを記入することができた。



《5年「新聞記事を読み比べよう」6年「インターネットの投稿を読み比べよう」》

視点① 対話の必然性を生み出す課題設定

5年はミライシードのオクリンク、6年はミライシードのムーブノートを児童一人ひとりが使用した。5年は、同じ内容を扱った2つの新聞記事の本文、リード、見出しをバラバラにしたものを組み合わせ



る活動を仕組むことで、「つながりを見付けて正しく組み合わせよう」という課題意識をもたせた。6年は、11の投稿を「適度な運動派」と「厳しい練習派」の2つの立場に分ける活動を仕組み、話し合いの視点を明確にすることで、対話を生み出した。

|視点② ICT を活用した深め合う対話|



5年は、並べ替えたカードを提出ボックスに送り、全員で共有し合いながら話合いをした。6年は、一つひとつの投稿をカードに表示し、意見、主張は赤色、理由と事例は青色で色分けしながら線を引き、グループ活動では、そのカードを見せ合うことで、視覚的にも共通理解ができ、自分の意見と比べながら、内容を整理することができた。

視点③ 自己の学びを再構築するまとめや振り返り

5年は、単元の最後に、①新聞記事の読み比べをした感想、②新聞記事について学んだこと、③学習を通して学んだこと、という3つの観点でふり返りを行うことで、学んだことを再構築し、これから新聞を読むときに、学習したことを生かしていきたいという思いをもてるようにした。6年は、単元の最後に「三丘小6年・共感を生む投稿八条」を作った。説得の工夫や投稿の続きに参加した学習を踏まえ、情報モラルにあたる点についても考えることができた。

(3) リーダー学習を意識した授業づくり



複式学習を成立させ、児童が学習の見通しをもって、自分たちで授業を進めることができるようにするために、まずは、板書の工夫を行った。高学年では、「めあて」「一人学び」「共学び」など書かれたカード、低学年では「め(めあて)」「じ(じぶんで)」「み(みんなで)」

と書かれたカードを使用している。また、様々な学習場面において、児童主体で話をつないで、話合いをするようにしている。

(4) スキルアップタイムによる基礎学力の向上

毎週金曜日のフリートークは、今年度の研究の大きな柱となっている「対話力」を鍛えるために始めた新しい取組である。リー



ダーが進行をしながら、テーマについてペア、グループ、全体など、様々な形態で取り 組んでいる。また、学年にこだわらず異学年でのフリートークも行っている。

(5) 話し合う場、発表する場の充実

児童の主体的な活動の一つに、委員会によるイベントがある。各委員会の5・6年生が話し合って様々なアイディアを出し、全校児童を対象にイベントを開催している。また、生活科や総合的な学習の時間で学んだこと(低学年の論語の朗唱、中学年のナス栽培・三丘の歴史、高学年の人形浄瑠璃・防災学習など)を11月に開催した「三丘っ子フェスタ」で発表した。

5 成果と課題

(成果)

- ・フリートークで理由を付けながら意見を交流させたり、他の児童の意見を引き出す質問をしたりなどのやりとりが、授業中の対話の中でも見られるようになってきた。
- ・まとめや振り返りの時には、自分が学んだことを文章化できるようになってきた。
- ・リーダーによる、授業や話合いの進行に上達が見られる。

(課題)

- ・様々なことに取り組む上で、学習したことを早く習得できる児童は、どんどん力を付けているが、その一方で学力差が大きくなってきている。
- ・やりとりを重ね深めていく対話力が不十分である。
- ・対話をしながら考えを深めていく上で、考えや意見の変容を文章に書いたりまとめたり する力が不十分である。

6 おわりに

昨年度の一人一台端末の導入より、ICT機器活用の可能性を探求しながら、複式授業を成立させ、一人一人に合った学びを提供するための学習指導の工夫について、職員一丸となって研修を進めてきた。中でも、少人数ならではの課題である、対話の活性化、深め合う対話に重点を置きながら授業改善に努めてきた。様々なアプローチを教員が見出し、共有することで、『様々なつながりから自分の考えを深めることができる児童の育成』の実現に迫ることができた。今後も、三丘小の良さや強みを生かしながら、学校、保護者、地域が一体となって教育活動を展開していきたい。

自分の思いや考えを明確にもち、お互いに伝え合う子どもの育成

~つながりを大切にした授業づくりを通して~

山口市立生雲小学校

1 はじめに

本校は、山口市の北部に位置し、四方を山に囲まれた自然豊かな学校である。本年度の児童は、1年生2名、2年生6名、3年生2名、4年生3名、5年生5名の計18名で、「夢や目標に向かって努力し、人との関わりを大切にしながら、ふるさとに貢献する生雲っ子~賢い人になろう!(生きる力を身に付けた人)」を学校教育目標に、本校教職員は一丸となって、知・徳・体のバランスのとれた生雲っ子の育成に努めている。

2 研究主題

昨年度は、本校児童の一番の課題である「お互いに伝え合う力」に対し、研究主題を「自分の思いや考えを明確にもち、お互いに伝え合う子どもの育成~つながりを大切にした授業づくりを通して ~」と設定し、授業内での友達同士のつながりや、学年を越えた交流によるつながり、YCAM連携「やまぐち子ども未来型学習プロジェクト」を通したICTを活用した地域とのつながりに重点を置き、研修を行った。その結果、目的意識をもった表現の場を多く設定したことにより、自分の思い伝えようという意欲や、人前で話すスキルの向上が見られた。しかし、自分の思いや考えを子ども自身の力で明確に言語化し、表現する力は十分とは言えず課題点としてあげられた。児童が自分の思いや考えを明確にもち、表現するためには、自分の思いを伝えたいと思う意欲だけでなく、思いを表現するための力(話す力・書く力など)、またその基礎となる基本的な知識・語彙力・情報収集能力が欠かせない。

そこで今年度は、特に「自分の思いや考えを明確にもつ」ことに重点を置きつつ、研究主題は昨年度から継続とし、引き続き YCAM と連携しながら ICT を活用した「地域学習」を行っていくとともに、ICT 機器を活用した他校との交流や、友達同士のつながりや地域とのつながりを大切にし、児童が主体的に表現力や情報活用能力を高めていくことを目指し研究を行うこととした。

3 研究の内容

(1) 校内授業研究・授業の工夫

研究主題に沿って授業づくりについての研究を行う。その際、以下の三つの視点を もとに具体的な手立て・内容を設定し、授業の工夫を行った。

- ① 自分の思いや考えをもつための工夫
- ② お互いに伝え合うための工夫
- ③ つながりを大切にした工夫

(2) 教育活動全体を通しての工夫

各学年の教科学習以外の活動でも、自分の思いや考えを明確にもち、表現する力を 育てるための工夫として、以下の活動を行った。

- ① やまぐち子ども未来型学習プロジェクト〜地域の魅力発見〜「360°図鑑」
- ② その他の活動(全校児童での活動、小小・小中連携、地域との連携)

4 具体的な取組

- (1) 校内授業研究・授業の工夫
- ① 自分の思いや考えをもつための工夫
 - ・ICT の活用

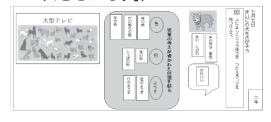
ICT の活用を通して、視覚的な手がかりを多くして理解を促したり、映像教材等を利用したりして学習への興味・関心・意欲を促すことができた。



また、5年生ではスカイメニュー「発表ノート」を活用することで、台形の面積 公式を求める際、自分の考えを図に書き込みながら分かりやすくまとめることがで きた。

・導入の工夫(授業研究 国語科2年「まいごの犬をさがそう」)

2年生では、主眼を「伝えたいことが正しく伝わるように、犬の特徴を意識して迷子の犬のお知らせを考えることができる」とし、たくさんいる犬から、相手に犬の特徴をクイズ形式で伝え、迷子の犬を見つけ出す学習を行った。学習の導入では、教師



が児童に見付けてほしい犬の特徴を伝えるが、情報が不十分であるため、なかなか 犬を見付け出すことができない難しさを味わわせることで、学習に必要感をもたせ 意欲的に一人学びを行うことができた。

② お互いに伝え合うための工夫

・付箋を活用した思考の整理(授業研究 国語科2年「まいごの犬をさがそう」)

一人学びでは、児童一人ひとりが他に情報として知りたかった犬の特徴を付箋に書き出し、児童全員の考えをまとめていく活動を行った。意見をまとめる際には、児童は友達の考えと自分の考えを比べながら聞き、自分の考えと同じ場合には、手元にある付



付箋1枚に1つの考 えを書き込んでいく。



友達と自分を比べ、 同じ考えの場合は、付 箋をまとめていく。

箋を重ねてまとめていくなど、一人ひとりの考えを整理することができた。

・ヒントカードの活用(授業研究 国語科1年「あいうえおであそぼう」)

1年生では、主眼を「【あひるのあくび】の創作を通して、リズムの調子のよさを楽しみながら【せかいにひとつのうた】を作ることができる」とし、前時までに学習した、詩の特徴や構成をもとに、児童二



「あ」の付く言葉が 思いつかないな…。 ちょっとヒントカ ードを見てみよう!

人でオリジナルの詩を一つ作成する学習を行った。間接指導(ペア学び)の際は、 児童同士で自力解決を行っていく中で、つまずきの手立てとなるよう、言葉の頭文 字に「あかさたなはまやらわ」の付く言葉をイラストで示したヒントカードを用意 した。児童二人は、課題解決を行う中で思考が止まってしまった場合、進んでヒン トカードを活用することできた。また、ヒントカードを通じて、児童相互で対話や 学び合いが行われ、考えを深めたり広げたりすることにつながった。

・複式学習リーダーガイドの活用

大きめの学習リーダーガイドを活用して、リーダー以外の児童も、学習の流れが一目でわかるようにした。学習リーダーは輪番制として、全員の児童がリーダ





ーを経験するようにしている。ホワイトボードに、自分の考え を記入し、黒板の前に出て、全員で話し合うことで、表現力の 向上にも結びついた。

③ つながりを大切にした工夫

・他校とオンラインを使った連携授業

本校は、各学年2~6人という極少人数で授業を行うため、児童相互の対話は限られてしまいがちである。そこで、5年生では外国語を用いてのコミュニケーション活動に目的意識をもたせるため、ALTが訪問している他の小学校と単元末に習得したフレーズを使って「ビデオ交流」を行った。また、同じ阿東中学校区で普段から交流学習を行っているさくら小学校とは、電子黒板・一人一台端末を用いて「リモート交流」を行った。子どもたちは他校児童との交流学習という





場の設定により、お互いのことを伝え合い理解し合う喜びや、会話を通して英語の楽しさを、味わうことができた。また、5年生外国語学習だけでなく道徳・宿泊学習の事前学習や国語でも各学年で「リモート交流」を行った。

・振り返りの工夫

1・2年学級では、学年初めから学級目標として「友達や先生の話は【目】と【耳】と【心】で聴く」よう指導をしている。このことは、日頃の生活だけでなく、学習場面でも同じことが言える。低学年のうちに話を聴く力をしっかり身に着けさせるためにも振り返りカードの中に、「聴く」ことを意識した項目を入れていた。

毎時間、同じ項目で学習全体を振り返る「振り返りカード」を活用した。振り返りの視点について \bigcirc 、 \triangle 、 \times



低学年用振り返りカード

で自己評価していくことで、〇の数等で児童自身が一目で自己の学習の学び方のよさや課題を知ったり、学び方の変容に気付いたりすることができると考えた。単元を通して同じ視点での振り返りを積み重ねることにより、児童は自分自身の学び方の変容(よさや課題)に気付くことができた。また、課題となった点が見つかった場合は、児童自身が改善しようと意識しながら学習に臨む姿が見られた。

(2) 教育活動全体を通しての工夫

① やまぐち子ども未来型学習プロジェクト〜地域の魅力発見〜「360°図鑑」

本校では、昨年度「やまぐち子ども未来型学習プロジェクト〜地域の魅力発見〜」と称して、山口芸術総合センター(YCAM)、山口市教育委員会、本校児童・全教職員で共同し「自分たちでつくる360°見渡せるデジタル地域図鑑」を低・中・高学年に分かれ作成し、ウェブ上で公開した。

360°図鑑 (yamaguchi-ygc.ed.jp) https://zukan360.yamaguchi-ygc.ed.jp/





今年度はさらにそれを発展させ、各学年で四季をテーマに同じ場所で季節毎に360°図鑑を作るという活動を行った。それぞれのテーマは下記の通りである。

- ○低学年・・・それいけ!生雲探検隊(小学校の植物・生き物)「生活科」
- ○中学年・・・あいらぶ生雲(観光梨園)「社会科・総合的な学習の時間」
- ○高学年・・・生雲の米作り(阿東米)「社会科・総合的な学習の時間・理科」

設定したテーマに沿って YCAM と連携を図りながら 360° カメラでの撮影・取材・Chromebook を使った図鑑制作に取り組み、完成した図鑑を用いて学習発表会で調べた事柄を発表した。また、作成した 360° 図鑑は今年度モデル校として追加となった 秋穂小学校・白石小学校の 2 校と交流した後、ウェブ上で公開予定である。

② その他の活動(全校児童での活動、小小・小中連携、地域との連携)

その他にも本校では、つながりを大切にするということをテーマに全校児童で学年を越えてお互いに学び合う生雲小Aという時間を設定したり、中学校との地域清掃ボランティアの参加など合同行事を通して、中学生との交流を進めたりしている。

また、本校地域は学校教育に対して協力的であり、地域の 方が様々な場面でゲストティーチャーとして来校してくださ っている。今年度の学校運営協議会では、児童参加型の熟議 も開催し、開校 150 周年に向けた取組について話し合った。



学校運営協議会 (熟議)

5 成果と課題

(1) 成果

- ・ 少人数であることを生かし、全校で学習や行事に取り組んだり、複式学習で上学年が良いお手本を見せたりすることで、下学年に良い影響を与えると共に、上学年の自己有用感・自己肯定感を高めることができた。
- ・ 他校や地域などとのつながりをもった授業や、360°図鑑を一般公開して生雲のことを知ってもらうという目的があることで、意欲的に活動に取り組むとともに、自分の考えと他校の友達の考えを比較し、考えを深めることができた。
- ・ Chromebook を活用しながら 360° 図鑑を作成したり、多くの授業で活用したりすることで、ICT 機器の操作技術や情報活用能力が向上した。

(2)課題

- ・ 説明する力や要約する力など表現の根本となる国語力に課題があり、子ども達の 伝える力を向上させていくためには、これらの力を更に高める必要がある。
- より良い複式学習のあり方について、研修や共通理解を深めていく必要がある。

6 おわりに

「やまぐち子ども未来型学習プロジェクト」をはじめ、友達同士・教材など様々な事柄とのつながりを大切にした授業作りを通して、実りある研究を行うことができた。今後もつながりを大切に、児童一人ひとりの伝える力を向上するための取組を行っていきたい。

ともに高め合い主体的に学ぶ児童の育成

~児童の実態に応じた学習の場の工夫~

美祢市立麦川小学校

1 はじめに

本校は美祢市の西部に位置し、全校児童13人の完全複式の学校である(その内、2年生と4年生は1人学年)。美祢市では、令和4年度から全ての小中学校で小中一貫教育が始まり、本校でも中学校区統一の教育目標「美祢を語り、夢を語れる地域の担い手の育成と豊かな地域づくりをめざして」を掲げ、子ども一人ひとりを大切にする学校をめざしている。その過程で子ども達に身に付けさせたい資質・能力を「基礎基本を身に付け、思いを主体的に

伝え合う力」「困難に立ち向かい、夢や希望に向かって がんばる力」「ふるさとを愛し、よりよく生きようとす る力」としている。

今年度、重点取組事項として学力の定着と向上を挙げており、「基礎基本の定着」「主体的な学び」をキーワードにして、全教職員で研修に取り組んでいる。



2 研究主題

本校では、平成25年度から、複式授業の学習過程を「予習+むぎ(学習の見通しをもつ)・が (一人学びで追究する)・わ (みんなで解決する)・「パワー (理解深化問題に挑戦する)・「ふる (学びを振り返り定着させる)」として、研究に取り組んできた。この「予習+むぎ・が・わ・パワー・ふる」のプロセスは、ずっと引き継がれ、児童に身についている。

複式学習では、児童に学習の流れを示し、リーダーの役割を持たせて、児童が自律的に学習を進めるリーダー学習の手法がある。昨年度の校内研修を進める中で、「主体的な学び」に課題があることが浮き彫りになり、このリーダー学習を進めることで主体性が伸びるのではないかという考えが広がった。しかし、本校では、極少人数なため、リーダー学習をそのまま行うのは難しい。また、少ない人数で学びをどのように深めるのかも課題の一つである。学びの場を、学級だけでなく、学校全体、オンラインによる他校との交流に広げるなど工夫が必要であり、ICTの活用がその活路を見いだすものと考えた。

そこで、令和4年度の研究主題を「ともに高め合い主体的に学ぶ児童の育成〜児童の実態に応じた学習の場の工夫〜」とし、研究仮説を次のように設定した。

学習過程を「予習+むぎ・がわ・パワー・ふる」とし、各過程において主体的に学ぶ児童の姿を追究するとともに、極少人数における学び合いの場を工夫すれば、「ともに高め合い主体的に学ぶ児童」を育むことができる。

3 研究の内容

(1) めざす児童の姿

本校の研究主題の解明に迫るため、研究主題にある「ともに高め合い主体的に学ぶ児童」を次の様に捉えた。

- ① 興味関心を持ち、「そうだね」「わかるよ」と共感しながら聞く子ども
- ② 自分の考えをもち、考えを伝える子ども
- ③ 友達の考えを自分の考えと比べながら聞く子ども
- ④ 互いの共通点や相違点を考え、相手を意識しながら考えを述べたり、話し合いをしたりする子ども
- ⑤ 学習を振り返り、自分の学びを言葉や文章で表現する子ども

また、児童が主体的な学びとなるように、これまでの「予習+むぎ・がわ・パワー・ふる」の学習過程を見直し、各過程におけるめざす児童の姿を設定した(**下表**)。

過程	め ざ す 児 童 の 姿								
予習	自分が何を学ぶか理解し、目的意識をもって授業に臨んでいる。								
むぎ	予習でもった疑問を解決しようとしている。								
が	課題解決に自主的に取り組んでいる。								
わ	多様な意見に進んで関わり、他者と共に新しい考えを生み出そうとしている。								
パワー	これまでの学びを目的に応じて活用修正し、進んで学びを広げようとしている。								
ふる	自己確認をし、次への見通しをもとうとしている。								

(2) 研究計画

①複式学級における学習過程の在り方

めざす児童の姿を具現化できるよう、学習過程「予習+むぎ・がわ・パワー・ふる」 を実践・検証する。

②リーダー学習の工夫

極少人数の複式学級という実態に合ったリーダー学習の在り方を探る。課題解決の方法を自己選択させるなど、各担任で取り組み、情報を共有する。

③ICTの活用

タブレットPC、電子黒板、オンライン交流授業など、ICTの利点をさらに活用し、 学習内容の定着と授業のスリム化につなげる。

- ④全校学習の場の工夫
 - ○全校フリートーク
 - ・毎月1回、ふれあい朝会の場を全校フリートークとする。テーマは、児童から募集 し、縦割り班ごとにリーダーが司会を進め、必ず最後には振り返りをおこなう。
 - ○全校ノート展
 - ・学期ごとに、自分のノートを公開し、友達と相互に見合うことで、ノートの取り方について学ぶ機会とする。また、友達からのメッセージをもらうことで、分かりやすいノートづくりの意欲化を図る。

4 具体的な取組

- (1) 学習過程の工夫による主体性の追求
 - ①「予習+むぎ・がわ・パワー・ふる」の学習過程の実践と検証・改善

日々の授業において、「予習+むぎ・がわ・パワー・ふる」の学習過程(右表)を実践し、検証と改善を行っている。児童は、この学習過程が習慣化しており、見通しを持って学習に取り組むことができている。特に、「ふる」の場面では、異学年の交流を取り入れる機会が増えてきた。

	予習	家庭学習で本時の学習内容を予習し、課題をもつ。
	むぎ	「予習」を通して、本時の学習の見通しをもつ。
	ָט כ	教師の説明を聞き、本時の学習内容を理解する。
		本時の学習内容が確認できる問題を自力解決しようとする。
l	が	自分の言葉で筋道を立て、話すようにノートに書いてみる。
学		自分の考えを式や図で表現したり説明したりする。
習過	-	出された考えを練り合い、最良の解答を伝え合う。
程	Ð	友達と様々な考えの比較検討を行い、自分の言葉にする。
_	パワー	発展的な課題にチャレンジし、自力解決しようとする。
	ハシー	友達と様々な考えの比較検討を行い、自分の言葉にする。
	> 7	授業を振り返って分かったことや気付いたことをノートに書く。
	ふる	授業の中で気付いた自分の間違いやつまずきをノートに書く。

②単元構成の工夫やエンドポイントの設定

1時間の学習が、単元全体を見通したエンドポイント(単元の最後に設定した学習活動) に向かっていることを児童に意識させることで、学習意欲を維持する。今日の学びが単元 全体のどのあたりで、どこに繋がっているのかを常に意識させた。

(2) 学び合いの場の工夫

①リーダー学習の工夫

極少人数の複式という児童の実態に応じたリーダー学習について、基本的に「任せる」「継続する」をキーワードとし、低学年から任せる場面を徐々に増やした。教師は子どもたちの学びを見守り、必要なときに入ったり考えを価値づけたりする支援者として、授業を行っている。

また、1時間の学習の見通しがもてるようにガイドボードを活用し、学習リーダーには 学習を進めるという自覚をもたせるとともに、指示だけでなく、話し合いを進めたり、ま とめたり、学習方法を選択したりと、自分で判断して学習を進めるようにしている。また、

リーダー学習には、リーダーを支えるフォロワー の存在も大切であり、1人や2人の極少人数の学 年では、教師がフォロワーとなって一緒になって 学びを深めている。

リーダー学習を学校全体で推進していくため、 昨年度は児童による授業参観を行い、5・6年生 のリーダー学習を他の学年が参観した(図1)。下 の学年にとって、めざしているリーダー学習をイ メージできるよい機会となった。



図1 児童による高学年の授業参観

②ICTを活用した授業の工夫

一人1台のタブレットPCが整備されたことにより、プレゼンテーションソフト等を使って、1年生から絵や写真を使った発表の経験を積んでいる。学級の中の異学年の児童や全校児童、職員室の職員、他校の児童にも伝える機会を設け、回を重ねるごとに友達の

よさを取り入れたり、アドバイスされたことを生かして話そうとしたりするようになった。

また、エンドポイントを他校とオンラインで交流する設定にすることで、児童の意欲の向上を図った。本校では、豊田前小学校とオンラインでの交流を継続的に行っており(図2)、他校の友達にも発表したいという児童の思いが膨らみ、意欲的に交流する姿が見られるようになってきた。



図2 オンラインで他校に発表

③全校学習の工夫

話し方、聞き方、ノート作りなど、学び方の基礎を身につけさせるために、全校での学習の場を設定し、全校フリートークや全校ノート展などを行っている。

全校フリートークは、極少人数での学びの課題となっている表現力の育成も目標の一つである。極少人数の授業では、多くの人の前で自分の意見を述べる機会が少ないため、全児童が集まる場を生かし、話し方、聞き方のスキルを指導している。低学年は、話し方や聞き方を上級生から学び、教室での授業でも使えるようになってきた。上学年も、低学年に対して優しく、わかりやすい口調で話すなどの配慮をしたり、手本になろうとしている姿が見られたりと、どの学年にも効果のある時間となっている。

全校ノート展は、ランチルームに自分の自慢の ノートを展示し、友達から付せんで感想をもらう全 校学習である(図3)。上学年のノートの使い方を手 本にし、ノートづくりを学ぶことができるよい機会 となっている。友達から価値付けしてもらえること で、ノートへの取組が大変丁寧になり、授業中に自 分の考えをしっかりと書いたり、友達の考えをメモ したりする姿が多くみられるようになった。



図3 付せんにコメントを書き込む児童

5 成果と課題

人数が少ないことをデメリットではなく、メリットとして考え、工夫していくことを全校で心掛けてきた。そのため、「異学年が身近にいる」という環境を生かした取組により、全校学習の中で自分を磨きつつ、他者を思いやる気持ちが育ってきた。また、他校との交流により、「遠くにいるクラスメイト」の感覚が芽生え、1人や2人の学年の児童も競争心を持って学習に取り組むようになった。研究主題である「ともに高め合い主体的に学ぶ」児童の姿が、日々の授業の中で少しずつ見られてきたのは、大きな成果である。

一方で、基礎的な学力の定着の面では、まだ十分とはいえないのが現状である。全国学力・ 学習状況調査や県の学力定着状況確認問題では、基本的な問題にも課題が見られた。今後も、 授業改善の中で学力を定着させていく手立てについて、全校で取り組んでいく必要がある。

6 おわりに

本年度から、ジオ学習のために全校で秋吉台へ行ったり、全校体育をしたりと、新たな試みを始めている。小回りのきく少人数の学校だからこそのメリットを生かし、児童の実態に合った取組を今後も続けていきたい。

自分の考えを広げ、深める児童の育成

~多様な考えを生み出す学習活動の工夫~

下関市立内日小学校

1 はじめに

本校は、1・2年児童(1年2人、2年3人)と3・5年児童(3年2人、5年4人)の複式2学級からなる全校11人の学校である。明るく素直で協力し合って学校生活を送っている児童は、学習にも意欲的に取り組んでいる。全校で活動し遊ぶことが多いため、下級生は生活の中から上級生の姿を見て学び、上級生は、下級生を意識することで自分の姿を見直すといったように、異学年での学び合いが自然に生まれている。その一方で、人数が極端に少ないことから多くの意見に接する機会が少なく、話し合い活動が成立しにくかったり、多様な考えを引きだすことが難しかったりするといった課題がある。また、生活経験や学習の理解力には個人差が大きく、子供同士の関わり合いの中で、考えを広げたり深めたりすることが難しい面もある。

2 研究主題

①これまでの研究の経緯

本校では、研究主題を「自分の考えを広げ、深める児童の育成~多様な考えを生み出す学習活動の工夫~」として、昨年度まで2年間研修を進めてきた。1年目は、「自分の考えを広げ、深める児童」について、系統立てた指導が行えるよう、目指す児童像を共有した。また、複式授業の進め方や学び方の意見交換を進めた。

	高学年	他者の考えのよさを取り入れながら、自分の考えを確かなものにすることができる児童
目		・自分の考えにないものを受け入れ、自分の考えに生かそうとしている。
指		・自分の考えをもとに、多様な観点からそれを吟味しようとしている。
す	中学年	他者の考えと自分の考えを比較しながら、よりよい考えをもつことができる児童
児		・自分の考えと比べたり関係づけたりして考えようとしている。
童		・他者の意見を認めながら、よりよい考えをもとうとしている。
像	低学年	他者の考えを受け入れ、自分の考えをもつことができる児童
		・自分の考えと同じか違うかを考え、違う考えも受け入れようとしている。
		・他者の意見を聞きながら、自分の考えをよりはっきりさせようとしている。

2年目は、目指す児童像に向け、2つの視点から多様な考えを生み出す学習活動の工夫について取り組んだ。具体的には、教師の働きかけを工夫する授業づくりや児童が主体的に学習を進める複式学級での授業づくりについて研究を進めた。

成果) 学年に応じた複式学級の学び方が定着してきた。 自分の考えを積極的に出し、表現できるようになった。

課題) 自分の考えは出せても、「広げる」「深める」ことは、十分といえない。 学年の構成人数が極端に少なく、「多様な考えを生み出す」ことが難しい。

本年度は、これまでの成果と課題を踏まえて研究主題を継承し、「多様な考えを生み出す」ということのとらえ方について話し合い、共通理解を図った上で、研修に取り組んでいる。また、授業改善に取り組むだけでなく、「自分の考えを広げ、深める」には、授業を支える日常的な支援が重要であると考え、基礎学力の向上や人間関係づくりについても研究主題を意識して取り組むことにした。

②「多様な考えを生み出す」とは

「多様な考えを生み出す」とは、一般的に「多くの種類の質の異なる考えを生み出す」ことといえる。しかし、本校の児童の実態や発達段階を考えたとき、「多様な考えを生み出す」ということを以下のようにとらえることが大切であると考えた。

多くの種類の質の異なる考えを生み出す力を育てることを視野に入れながら も、たとえ同じ考えでも違う表し方をする友達の意見を聞きながら、自分の考え を広げていくこと。具体的には、下の3つの姿を目指すことにした。

「**言いたかったことは これだ。**」 自分の考えを自覚する。 「**なるほど、そうか。それはいいね。**」 自分以外の考えを納得して取り入れる。

「新しい考えがもてた。」

言葉やイメージ等を比較したり、整理したりする中で、 自分の考えを明確にして、新しい気づきをもつ。

③研究仮説

児童が学習に取り組む中で、自分の考えを広げ深めていくためには、まず下関市が目指す「学びが好きな子ども」の育成を土台にして、学習対象について興味をもって意欲的に取り組めるような仕掛けや授業づくりが必要である。この仕掛けとは、導入、課題提示や発問等のことである。また、複式の環境下では、自分たちで学習を進める学び方を身に付けることが大切と考え、次のような研究仮説を立てた。

「多様な考えをもつために学習活動を工夫し自分たちで学習する学び方を身に付けることができれば、対話的な学習が活性化し、児童は自分の考えをもつだけでなく、自分の考えを広げ、深めることができるのではないだろうか。」

3 研究の内容

- ① 多様な考えをもつための授業づくり
 - ○課題設定の工夫
 - ・学習課題の焦点化 ・提示の仕方
 - ○意見の交流の場の設定

(自ら学習を進めていくために)

- 板書、ホワイトボード
- ・ICT機器(電子黒板、タブレットなど)
- ・視点を多様に与えるヒント (図、絵、思考ツールなどの活用方法)
- ・振り返りの充実など

- ② 複式学習の充実
 - ○学習の進め方の共有化
 - ○構造的な板書のあり方 (授業の流れが分かる板書)
 - ○学習環境の充実
 - ・掲示の仕方
 - 机の配置など

③ 日常的な支援のあり方 基礎学力の向上

豊かな人間関係づくり

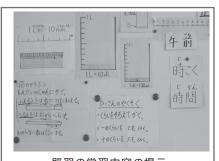
④ 授業研究

①②をもとに、③の視点も考慮して、授業研究を行う。授業研究の中で、各々の研究が本当に有効なものであるか検証し、さらなる改善の方策を探る。

4 具体的な取組

(1) 多様な考えをもつための授業づくり

多様な考えをもつため、まず学習の見通しがもてるように⑦学習課題の焦点化との提示の工夫を重要視した。 のについては、何を学ぶかが明確になるよう言葉を吟味 して発問している。 のについては、既習の学習内容や学 び方のヒントを自由に見ることができるようにしている。



既習の学習内容の掲示

これらのことで、児童が見通しと安心感をもって学習できるようにしてきた。また、課題を自力解決した後に意見交換の場を設定した。そこで、他者の考えと自分の考えとを比較したり整理し取捨選択したり、よりよいものを見つけたりする。さらに、話し合いをもとに、自分の言葉で言い換えたりすることで、新しい気づきをもつことができるのではないかと考えた。その際には、自分の考えを明確に伝えるために、ホワイトボードや電子黒板、タブレット端末を使って絵や図、式や表など

を示しながら話すことも指導している。「

(2) 複式学習の充実

本校の複式学習では、学年や発達段階に応じて直接指導と間接指導の組み合わせのバランスを考慮し、軽重をつけながら学習を進めているが、最終的に目指すのは、児童が主体的に学習を進め、必要に応じて指導に入る授業である。そのためには、課題解決に向け



意見交換の場 自分の考えを示しながら話す

て自分たちで学習を進める力を身に付けなければならない。その際に学習活動を進めるのがリーダーである。全児童がリーダー役をできるように輪番制で行っている。

低学年では、間接指導時にだれがリーダーになっても学習を進められるように、 学年や内容に合わせて、学習活動の流れを示している。それを見ながら、自ら学習 が進められるように T2 が補助をしながら複式学習の進め方について学んできた。

高学年では、特に算数科において教科書やデジタル教科書を使って自ら学習を進める力が身に付いてきた。学習を展開する力や学力等に個人差があり進行が滞ることもあるため、全体の理解を確認しながら進める役割や、学習の進行が困難な状況になったときに、リーダーを支えるフォロワーの役割も意識して指導している。

また、学習をスムーズに進めるために、「めあて、学習の流れ、まとめ」と構造的な板書に留意しており、児童が学習の見通しをもつためだけなく、間接指導時の児童の学習の進行状況や思考の流れを教師が把握することにもつながっている。



教師に頼らず自分たちで学習を進める



間接指導時に T2 が補助



児童が学習を進めるが、時には教師が主導

(3)日常的な支援のあり方の研究

自分の考えを広げ、深めるためには、基礎学力の向上(下校前の15分間を使った「夕学」)や人間関係作り等が必須であると考え、日常的に支援している。

○フリートーク・スピーチ

自分の考えや思いを表現するだけでなく、発表や質問の仕方等の対話の基礎的スキルを身に付ける場としても実施し、身に付けたことが授業でも生かされている。さらに、毎日の下校時全校集会でも順番にスピーチの機会があり、少人数で順番がまわるのも早く、何度も繰り返し話すことに慣れてきた。下学年にとっては、話し方や対話を学ぶ機会となっている。上学年の話し方を手本に一日を振り返って、楽しかったことや授業で取り組んだこと等について、全校の前で堂々とスピーチしている。

○朝読書

毎朝、登校後の15分間、全児童・職員が図書室で読書をしている。継続的に取り組んでいるため貸し出しが日常的で読書習慣も身に付いてきた。また、火曜日は、低学年に向けて地域ボランティアが読み聞かせを行い、児童も楽しみにしている。この関わりも読書への興味や知的関心を広げることにつながっている。また、自分の読んだお勧めの本の紹介を毎月文章と絵で紹介している。これも、自分の考えを表現する場となっている。

○大人や中学生とのつながり



話す・聴く・問いをもつフリートーク



帰りの会で全校の前でスピーチ



地域ボラティアによる読み聞かせ

JA や地域の協力のもと、毎年全校で田植え、稲刈り、はぜかけに取り組み、中学年からは稲の成長の観察や脱穀もしている。他にも、地域や保護者による夏休明けの学習支援、校区美化活動、地区防災訓練など地域と関わる取組は多く、ふるさとについて学ぶ機会となっている。運動会、学習発表会、芋の栽培(低学年)、中学校家庭科における交流(低学年)など、中学生との交流も盛んである。児童は、身近な手本として大人や中学生の姿から学び交流することの喜びを感じながら、物おじせず進んで関わっている。並行して、他校とのオンライン交流や、遠足、社会科見学、合同授業も進めている。限られた人間関係の中で、経験が少なく意見や考えが広がらないという本校の課題に対して、地域や中学校、他校との交流は貴重である。周囲の方々に温かく見守られながら、様々な経験を通して多面的な見方や考え方に触れることなどが自分の考えを広げ深めることにつながっている。

5 成果と課題

学習課題を焦点化し、何を学ぶのかが明確化されてきたことで、見通しをもち、安心して学習に取り組めるようになり、話し合いの場で、どの児童も自分の考えを意欲的に表現できるようになってきた。まだ十分と言えないが、学年なりに話し合い活動も活性化しつつある。また、複式学習での学び方も身に付いてきた。今後は、学習を形式的に進めるだけでなく友達の理解度を確認しながら進めることができるリーダーやフォロワー、ファシリテーターの育成が課題といえる。成果のあったものは、今後も引き続き実践し、課題に対してはさらに研究を進めていきたい。

自分の思いや考えを進んで表現できる児童の育成(2年次)

~極小規模校だからこそできる授業の工夫を通して~

阿武町立福賀小学校

1 はじめに

本校は、農業、林業、畜産業が盛んな山間部に位置していて、地域素材に恵まれた環境にある。本年度の全校児童数は9名で、第3学年が欠学年のため、低・高学年が複式学級、第4学年と特別支援学級が単学級の編成をとっている。日頃は、各学級で少人数による授業を行っているが、年間を通して全校道徳や福賀ふるさと夢太鼓等、全校児童で行う授業や活動もたくさんある。また、保護者や地域の協力が厚く、近年のコロナ禍においても、感染対策に十分に留意しながら、ふるさと学習や学習発表会、田植えから稲刈り、親子もちつき大会へと続く米作り体験等、特色ある教育活動を行った。

しかし、本校ならではの課題も少なくない。「話合いが深まらない」、「新しいアイデアが生まれない」等は、極小規模校の児童に対して言われがちな話であるが、教員に対しても同様の感がある。少人数の上に行事が多いため、前年度のやり方を踏襲しがちで、それに囚われることが、内容の形骸化や教員の負担感につながっているように思える。この悪循環を打開するキーワードとして「極小規模校だからこそできる」を掲げ、研究に取り組むこととした。

2 研究主題

上記の研究主題は、本校児童が長年抱えている課題に対して設定したものである。その課題を教師サイドの新たな視点と行動力をもって解決するために、上記の副主題を設定した。極小規模校の利点や地域の特性、それらをアレンジする教員のアイデアを生かして、極小規模校においても新たな教育活動が創造されることをねらっている。

3 研究の内容

(1) 研究計画

本校だからこそできる授業を創造し、その確立に必要な視点や手立て等を見出すために、3年のスパンで取り組むこととした。 $1\sim3$ 年次までのそれぞれの研究の目的と内容、年次ごとの系統性を以下に示す。

1年次(令和3年度)『地域素材の教材化を図る』

昨年度における地元の農業、林業、畜産業を教材としたふるさと学習の新たな取組 や、今までの取組にアレンジを加えたものを以下に示す。

- ・地元に飛来したアサギマダラの観察、地域おこし協力隊の方による草木染体験 等
- 無角和牛とホルスタインを比較しながらの調査活動
- ・スマート農業の見学と体験及び「福賀の農業のすごいところ」についての討論会
- ・間伐の見学と間伐材を使った発電についての講話及び発電のモデル実験
- ・四つ葉サークルによる紙芝居「宇生賀の七不思議」の上演と、その話に関連した場所を巡るウォークラリー

2年次(令和4年度)『全校合同授業における効果的な指導方法を見出す』

本年度は「全校〇〇」と称した全校合同授業を行い、そこで講じた工夫や手立て等の効果について検討し、異学年で授業を行う際の指導方法の確立をめざす。

3年次(令和5年度)『極小規模校だからこそできる授業の創造』

来年度は、これまでの研究の成果を基に、本校ならではの授業実践を積む。

(2) 本年度の研究の視点と評価方法

ア 研究の視点

視点1 全員参加できる取組の工夫

例えば、福賀ふるさと夢太鼓を見たとき、学年によって演奏の難易度は違うが、 その演奏全体は調和のとれたものになっている。このように、一人ひとりの役割が 保障されているかどうかを一つ目の視点とする。

視点2 全学年に学びや達成感等のある授業の工夫

一人ひとりの役割が保障されていても、そこに学びがあり、達成感が生まれる授業でなければならない。学年や発達段階に応じた学習内容があるかどうかを二つ目の視点とする。

イ 評価方法

授業者は、授業で講じる工夫や手立てを指導案上に示す。参観者は、その工夫や 手立てが研究の視点1、視点2の効果を発揮しているかどうかを評価する。参観者 は、本校教員だけでなく、萩・阿武小学校教育研究会へき地・複式教育部会や阿武 町3校協働研修会等を活用して幅広く募り、多様な視点から評価してもらうようにする。

4 具体的な取組

- (1) 全校学級活動「メディアとのつき合い方をかんがえよう!」(6月27日実施) 授業者 校長 中野 達史
 - ア 授業の意図と主な活動

学校保健安全委員会で行われたもので、メディアの使い方について親子で考え、 実生活で実践できる目標の設定をねらった。

導入 メディアの問題点について話を聞く。

展開 親子で話し合う。

終末 親子で決めたことを発表する。

イ 参観者からの評価(◇肯定的 ◆否定的)

「視点1 全員参加できる取組の工夫」について

- ◇「メディア」、「前頭葉」等の用語をイラストで示したり、メディアによる影響を「○○問題!」と見出しにしたりと低学年にも分かりやすい手立てや配慮が随所に見られた。
- ◇聞き手を引き付ける話術も巧みで、合間にクイズを入れるなどの工夫もあり、ほ ぼ一方的にプレゼンする形にもかかわらず時間を感じさせないものであった。

「視点2 全学年に学びや達成感等のある授業の工夫」について

- ◆児童の記述には、「やりすぎない」、「時間を決める」等、深まりが感じられなかった。「作戦を成功させるための具体的なめあてを考えよう」という問いは過去にも使われていて、形骸化した回答をするしかなかったのかもしれない。
- ◆全校で行いながら、異学年同士の関りがほとんどなかった。本時の主眼の具体的 なイメージをもつ必要があった。
- (2) 全校算数科「グラフを使って小麦を助け出せ!~データの活用~」(7月13日実施) 授業者 教頭 鎌田 潤一

ア 授業の意図と主な活動

みんながかわいがっている小麦(ウサギ)が、危険生物が出没する山奥に連れ去られたという設定で、それぞれの学年で扱う出没情報のグラフを読み解き、どのような時間帯と天候のとき助け出せばよいか見出させることをねらった。

導入 小麦が連れ去られたという場面設定を把握した後、与えられたデータやグラフをどのように扱えばよいか話し合う。

展開 各学年に分かれ、グラフを基に提示された問題に答える。

終末 グラフから読み取ったことを基に、小麦救出作戦について話し合う。

イ 参観者からの評価(◇肯定的 ◆否定的)

「視点1 全員参加できる取組の工夫」について

- ◇学年ごとに問題を設定することで、特に低学年児童は最後までやり遂げようとする姿が見られた。絵カードが84枚と、1年生にとって未習の多さだったが、9cm四方のカードを棒グラフ上に並べ、与えられた問題にグラフを基に答えていた。
- ◆4年生には、折れ線グラフの傾きから、各危険生物が昼行性か夜行性か、晴れと 雨どちらがよく活動するかを見出させたかったが、個数の僅かな差にとらわれて しまい全体を俯瞰することが難しかった。
- ◆ 5 · 6 年生の円グラフでも混乱が見られ、辛うじて各場面における危険生物の多 少や、総数が異なる円グラフ同士は比較できないことに気付く程度だった。

「視点2 全学年に学びや達成感等のある授業の工夫」について

- ◇低年生は、「小麦ちゃんを助けるぞ!」と声を掛け合いながら張り切って絵カードを並べ、4・5・6年生は課題に対してよりも低学年に負けまいという気持ちが生まれ、全校で学習する意義が感じられた。
- (3) 全校道徳「あいさつは、だれのため?」(9月14日実施)

授業者 教諭 藏永 京子

ア 授業の意図と主な活動

時と場に応じたあいさつの仕方や、あいさつがもたらす効果について話し合わせることで、実践意欲の向上をねらった。

|導入| 初めて会った人にどのようなあいさつができるか自己評価する。

展開 様々な場面を見て、どのようなあいさつをすればよいかグループで話し合う。

終末よいあいさつをすれば、どのようなよいことがあるか話し合う。

イ 参観者からの評価(◇肯定的 ◆否定的)

「視点1 全員参加できる取組の工夫」について

- ◇導入では、低・中学年の自己評価に比べて、高学年の自己評価が低いことから、「何がいけないのだろう?」、「どう改善すればよいのか?」等、課題意識をもって学習に取り組むことができた。
- ◆全校道徳を3年間続けてきた成果がグループの話合いにおいても発揮された。ただ、成熟された授業であるからこそ、多様な意見を引き出す課題設定や、議論を深めさせる話合いのもち方等、一歩前進させる手立てが欲しかった。

「視点2 全学年に学びや達成感等のある授業の工夫」について

◆振り返りには意気込みが記述されていたが、それが型どおりの回答に見えて実践 につながるだろうかと言う懸念の声も出された。児童が本当に実践できるか揺さ ぶりをかける工夫も欲しいところであった。 (4) 全校国語科「秋の言葉で気持ちを表そう」(11月9日実施)

授業者 教諭 三輪 美咲

ア 授業の意図と主な活動

集めた秋の言葉から自分の体験を想起させるものを選び、それを基にグループで エピソード・トークを行うことで、言葉に対する感性を豊かにすることをねらった。

導入 次時に学習発表会で掲示する俳句を作ると予告した後、秋からイメージする 気持ちを発表する。

|展開|| 学年ごとに与えられたテーマに沿って、秋の言葉を集める。

終末 集めた秋の言葉を使って、グループでエピソード・トークを行う。

イ 参観者からの評価(◇肯定的 ◆否定的)※萩・阿武小学校教育研究会へき地複式部会 「視点1 全員参加できる取組の工夫」について

- ◇秋の言葉を使ったエピソード・トークは、同じ言葉であっても一人ひとり体験が 違い感じ方も違っていたので見応えがあった。
- ◆授業者自身の俳句(小学校の時の受賞作)を提示することで、児童が見通しをもっことができた反面、低学年が俳句を作るのは難しいのではないか。

「視点2 全学年に学びや達成感等のある授業の工夫」について

- ◇学年に応じたテーマの設定や、タブレットを活用した資料が用意されたので一人 学びの活動が充実していた。
- ◇各学年で調べたことを縦割り班で共有できたので、言葉の広がりを感じさせることができたと思う。

5 成果と課題

ここまで計4回の全校合同授業を重ねてきたことで、授業のタイプが全学年同じテーマで同じ活動で進められるものと、全学年同じテーマであるものの活動は学年に応じたものに分かれることがわかった。それぞれのタイプについて考察してみる。

(1) 全学年同じテーマで同じ活動の授業(全校学級活動、全校道徳)

どちらの授業も身近な課題を扱ったため、共通の課題意識のもたせるのは比較的容易である。縦割り班の話合い活動も今までの経験の積み重ねがあるので、授業者のねらいどおりの授業を仕組みやすい。しかし、各学年または低・中・高学年にあった主眼の設定が不十分になりがちで、こうなると学習を深めさせるという点で弱さがある。

(2) 全学年同じテーマで活動は学年に応じた授業(全校算数科、全校国語科)

小麦(ウサギ)を助け出す、学習発表会に向けた俳句を作る等、児童の興味を引く テーマの設定に教師のアイデアが試される。主な活動は学年に応じたものになるため、 主眼の設定は容易と思われるが、それを達成させるための問題設定にも授業者の力量 が問われる。全校国語科のように各学年に課せられた問題が解決されると、終末の活 動が充実したものにつながるので、今後の授業づくりのヒントにしたい。

6 おわりに

「極小規模校だからこそできる」を研究の軸として掲げることで、教員の授業づくりに対する意識も変わってきた。へき地複式教育と言えば、「わたり・ずらし」、「リーダー学習」等が取り上げられがちだが、新しい視点とそれに伴う新たな手法も取り入れる必要がある。新しい提案を本校から発信できるよう、今後も研鑽を積む所存である。

第52回山口県へき地・複式教育研究大会

山口市立さくら小学校

研究主題

「子供の主体性を引き出す複式(少人数)指導」

~ 対話を通した 深い学び合いをめざして ~

2 会場 山口市立さくら小学校

3 日 程

12:4	45 13:15		14:00	14:35	15:00	15:1	0 16:30
	受	公 開 授 業	休憩	アトラクション	開会行事	移動	研 閉 究 分 協 議 事

(1) 公開授業

学年	教科	単元名	指導者	場所
3・4年	国語	3年 すがたをかえる大豆 4年 世界にほこる和紙	西村 規子	3 · 4 年教室
5・6年	国語	5年 たずねびと 6年 やまなし	筒井 啓太	5 · 6 年教室

- (2) アトラクション 14:15~14:30 (於:体育館) あとう夢語太鼓 (5・6年児童)
- (3) 開会行事·全体会
 - ①会長あいさつ 防府地区へき地・複式教育振興会 会長 藤本 孝治
 - ②講師及び来賓紹介
 - ③会場校校長あいさつ 山口市立さくら小学校 校長 兜坂 弘子
 - ④研究の概要 山口市立さくら小学校 教諭 三浦 しのぶ
- (4) 分科会・指導助言 (閉会行事を含む)

学年	教科	場所	授業	者	指導助言者
3・4年	国語	ホール	西村	規子	山陽小野田市立有帆小学校 校長 池上 雅代 様
5・6年	国語	ランチルーム	筒井	啓太	元萩市教育委員会複式学習指導員 松永 隆幸 様

4 大会概要

- (1)公開授業
 - ①3・4年 国語科(授業者:西村 規子)

【3年 すがたをかえる大豆】「食べ物ひみつブック」作りに生かすために、教材文から説明の仕方の工夫(事例の順序)を見つけることを目標とした。見つけた説明の工夫は「説明はかせシート」に蓄積していく。公開授業では、事例の順序を見付けた後に、chromebookを使って、子供たちが調べている食品の並べ替えをする活動を設定した。

【4年 世界にほこる和紙】「伝統工芸リーフレット」作りに生かすために、筆者の伝えたいことを短くまとめることを目標とした。各段落の要約文をもとに、文章全体から筆者の伝えたいことを短くまとめ(要約する)、友達と比べ合い、よりよい要約文を書く活動を設定した。

②5・6年 国語科(授業者:筒井 啓太)

【5年 たずねびと】「物語の全体像をとらえ、考えたことを伝え合おう」で登場 人物の心情の変化を読みとるとともに、自らの気持ちや考えに、どのような変化が あったかを伝え合うことをめざした。綾の心情は心情曲線に表し、児童の気持ちは クロームブックを活用して毎時間残すことで、綾の変化と児童自身の変化を比べや すくした。

【6年 やまなし】「ビブリオバトルをしよう」に向けて、宮沢賢治の生き方や考え方を読みとり、作品に込められた賢治の思いを想像することをめざした。「やまなし」の2枚の幻灯を児童自身で絵にまとめていき、賢治らしい言葉や表現を書き込むことで、「五月」と「十二月」の違いを明確にして比較する活動を行い、より賢治の思いを感じ取ることができるようにした。

(2) アトラクション

「あとう夢語(ゆめ)太鼓」という地域団体の方に指導を受け、本校5・6年生の 児童が、「生命の詩(いのちのうた)」と「豊年太鼓」の2曲を和太鼓で演奏した。

(3) 本校の取組発表

昨年度から「子供の主体性を引き出す複式(少人数)指導」の研修主題のもと教師の見守り型支援を重視した研修を行い、児童の学び方の定着や主体性は確立されてきた。その取組の中で、児童が対話を通して課題を見付け、互いの考えを伝え合い、深め合う力の育成が課題にあげられた。

そこで、今年度はサブテーマを「対話を通した深い学び合いをめざして」として、 自分の考えを明確にする「一人学び」を十分に行い、対話を通して学び合う「共学 び」をすることで思考力を深め、より主体的に学び、表現する力の育成をめざし取り 組みを行ってきた。研究の重点内容は、国語科における「さくら小スタイル」を意識 した授業作りと、ICTを活用した複式授業の開発である。

- ①「さくら小スタイル」を意識した授業作り
 - ・複式授業を円滑に行い、学習リーダーとフォロワーが協力しながら学習を進める ための学習ガイドの設置と、全ての児童に学習リーダーを経験させる学び方の基 礎作りをしている。
 - ・学習リーダーの役割の中で、意見を聞き出すことや、内容の整理などのファシリテーター力を意識した学習の進め方に取り組んでいる。

- ・児童と共に単元計画を立て、単元を通して身に付ける力を自覚させたり、単元の 同時導入と同時終末の指導を行い、他学年交流をさせたりする工夫をしている。
- ・導入場面の児童の主体性を引き出す主発問の精選や、子供だけで解決可能な補助 発問の工夫を行い、課題解決に向けての話合いの活性化を図っている。
- ・振り返りや児童アンケートを充実させることで学習内容の確認や自己変容を自覚 化させている。また、授業改善や児童の成長を見取り、教材研究にも役立ててい る。
- ・対話を通した深い学び合いの実現に向けて、「話し方・聞き方」を意識した指導 や、児童の思考を可視化・操作化する思考ツールを活用し、対話の活性化や思考 の深まりを生み出す工夫をしている。

②ICTを活用した授業の開発

- ・電子教科書を使用し、根拠となる箇所を切り取って提示したり、SKYMENE のポジショニングを活用したりすることで、効率的に考えの共有や比較などができるように工夫している。また、ジャムボードやSKYMENEの発表ノートで 互いの考えを比較・分類したり、内容を整理したりすることで思考を深めることができるようにしている。
- ・学習のまとめや振り返りの蓄積、プレゼンテーションとして活用することで学習 の内容の確認や自己変容につなげたり、表現の工夫につなげたりしている。
- ・他校とのオンライン授業に活用することで、意見の交流や多様な考え方を知り、 見方や思考を広げることにつなげている。

(4) 分科会

①3・4年 国語科(6グループ 46名)

対話を通した深い学び

- ・みんなが黒板やホワイトボードの前に集まり、自然に自分の言葉で話し合っていた。活発な意見交流をしており、日頃からよく発言している姿が想像できた。
- ・4年生は、グループから全体という話合いの流れがあり、対話することで答えを 出し、それを比較する時間があったため、1人で要約する際に生かされていた。
- ・自分の意見・考えを説明していたが、双方向性が出てくるとより深い学びになる のではないか。対話が苦手な児童への具体的な手立てがあるとよい。

見守り型支援

- ・必要に応じた声かけなど、重要な部分で支援できていた。
- ・1時間の流れが示されていたり、これまでの学習の足跡が掲示物等でしっかり残されていたりするため、学習リーダーが中心となり、児童が自分たちで学習を進めることができていた。

主発問や補助発問が工夫されていたか

- ・3年生は「自分が筆者だったら」という視点だったため、考えやすい発問となっていた。また、最初に自分で順番を決めることで、筆者の並べ方の工夫に自然と 意識が向いていた。
- ・学習のゴールが明確で分かりやすく、「プロ」「博士」という言葉を使うことで、 子供が前のめりになる魅力的な課題だった。

ICTの活用について

・chromebook を使うことで、意見の共有や訂正を簡単に行うことができていた。

- ・4年生では、この時間は ICT 機器を使わなかったが、ホワイトボードを使ったことで黒板に考えを残すことができたため、1人で要約するときの手掛かりになっていた。
- ②5・6年 国語科 (6グループ 36名)

対話を通した深い学び

- ・ホワイトボードや電子黒板など思考を可視化するツールを使い、意見の交流や内容の整理などができていた。
- ・意見をもとに理由を述べて発言をしたり、その意見を分類し、まとめたりする中で考えがより確かなものとなっていた。
- ・まとめの場面で教師が学習課題に即した支援を行うことで振り返りがめあてとつ ながってくるので、教師の関わりが必要だった。
- ・児童が話し合う中で新たな価値へ気付くことはなかなか難しいのであれば、教師が問い返しや、ゆさぶりなどを行い、深める必要があった。

見守り型支援

- ・文型を与えたことで、自分でまとめることができていた。
- ・児童に疑問やとまどいが生じた時に、教師が必要な支援を行い、その他の場面で は児童の主体性に任せて学習を進めることができていた。
- ・評価や価値付けは教師の役割である。ねらいに迫ることができていたかなど、そうした教師のまとめや深める場が必要である。

主発問や補助発問が工夫されていたか

- ・学習の足跡や前時の板書を見ながら主発問を考え、教師が設定した補助発問は分かりやすかったので児童が自力解決につなげることができた。
- ・主発問(めあて)に即した振り返りをすることが大切である。そのためには、振り返る視点を提示し、交流をもつことで次時の課題を設定することができる。
- ・ゆさぶりや切り返しの発問の準備が不十分だったため、児童の話合いが深まらな かった。

ICTの活用について

- ・ジャムボードを用いた意見の色分けや分類をすることで、意見の可視化や考えの 共有ができていた。
- ・振り返りを表にすることで、全員の思考の変化や学びの過程が分かる。
- ・学習リーダーだけでなく、タブレット操作の役割を与え、それぞれがスムーズに 学習活動を進められるとよい。
- ・chromebook に残した記録を印刷し、ノートに貼るなどしてノートにも学びの蓄積を残すことも必要なのではないか。

(5) 指導助言

① 3 · 4年 国語科

〈 指導者:山陽小野田市立有帆小学校 校長 池上 雅代 様 〉

○主体的な学びの実現

知的好奇心を刺激し、ねらいに迫る学習課題を設定することが大切である。「やってみたい」というわくわく感と「やれそうだ」という安心感があり、見通しのもてる学習過程にする。

学習の終わりの振り返りは、自分の学びを見つめ直すことであり、既存の知識の構

造に新たな知識が組み込まれていく。振り返りを書くことによって、深く考える熟 考が生まれ、その結果、深い学びも実現する。(ICTを効果的に使って振り返り を書くこともよい。)

○共学び・対話的な学び

一人学びで学んだことを他者にアウトプットすることで自分の考えがより明確になり、より焦点化される。人から情報収集することによって自分の考えに広がりが生まれる。情報が可視化されて操作化されることで、児童が自ら学び共に学ぶ姿が具現化される。そのためにも、共通の言葉(学習用語)を用いることが大切である。子供たちが同じ概念である言語を使うことによって子供たちの学びも深まっていく。判断を促す発問や問い返しの発問などを教師が準備したり、子供たちも考えるための技法(比較する、分類するなど)を身に付けておいたりすると、対話が成立するようになる。

○複式学級における学級経営・指導計画

学級集団で少人数異年齢集団であることを生かすように学級経営を行い、同単元指導を可能な範囲で取り入れることと書かれており、学習の流れは単式学級と変わらない。複式学級の教育課程の工夫を行うことが大切である。

(参考資料:平成7年に文部省から出ていた「小学校複式学級指導資料」)

○付けたい力 (何ができるようになるか)

子供たちに力を付けるためには、何ができるようになるのかを明確にする。今回の授業では、読む力を生かして書く活動につなげる単元構成であった。意欲的に取り組むために3年生は「食べ物ひみつブックを作ろう」4年生は「伝統工芸リーフレットを作ろう」という単元のゴールを示していた。

教科書をしっかり活用することが大事である。教科書の1ページ目を見ただけで何をするかが子供たちにも理解できる。また、教科書の最後には、振り返りが自分でチェックできるようになっている。見通しを教科書でもたせることも大切である。

- ○複式学習指導の悩みに対して
- ・多様な考えを生み出すためには・・・ねらいにせまるような発問、子供たちの考え を引き出すような発問があるから多様な考えが生まれる。それを比較することで子 供たちはより深い考えが生まれる
- ・間接指導中の姿が見えない・・・教師が俯瞰してそれぞれのグループの様子を見ていたら、全体を見取ることができる。子供の位置と教師の位置を考える。また、間接指導中の子供の思考を見える化する工夫が大切である。(例えば、共通の具体物を使った操作活動を入れ、操作の跡や思考過程を残すなど)
- ② 5 · 6 年 国語科

〈 指導者:元萩市教育委員会 複式指導員 松永 隆幸 様 〉

○複式授業について

教材研究、単元の計画をする際に重要なことは、主体的・対話的の主語は常に「子供」であり、教師が考えたものを始めから提示しないよう注意する必要がある。 単元のめあても、本時のめあても、主体的な学びをめざすためには、子供の言葉を 生かして設定することが大切であり、そうすることでめあてが子供のものになり、 目標をもって学習に取り組むことができるようになる。単元の導入部分でしっかり 対話をし、ゴールを明確にすることや、どのように学習を進めていくかも子供自 身が自分事としてとらえることが大切。教師が設定する場合は、なぜそのめあてなのか、どのような力が身に付くのかをきちんと理解させることで、主体的に学びに向かう姿勢が生まれてくる。

授業を進めていく中で、教室のどこかに単元のゴールが見えるようにしておくことも、目標を意識させるためには効果的な方法の一つ。また、単元計画も掲示すると、どこまで学習が進んでいるかが分かりやすくなり、子供が次にどのような学びが必要になるかを考えやすくなる。

子供の思考を支えるものとして、学びの足跡が見えるような掲示物や、ヒントカードがあるが、自己選択できるような提示の仕方をして、必要なときに見られるようにしておくと、安心して学習することができる。

○本時の授業について

本時のめあてが授業前から黒板に提示してあり、今日どのような学習をするのかが分かりやすくなっていたが、めあてが子供たちのものになっていたのかどうかという点で、設定の仕方を子供たちが主体になるようにすることが大切である。学習ガイドは、どのような活動をすればよいかが明確に書かれていることで、学習リーダーが進めやすくなる。また、話合いの場面では、何のために、どのように話し合うのかをはっきりさせておくことで、子供たちがスムーズに取り組むことができる。そして、発表の時には一人ずつ席から発表し、リーダーがまとめていったり、黒板の前に全員が集まったりして、授業形態も目的によって変更していくことで、より話合いが活発になるため、効果的に取り入れていくことが大切である。

見守り型支援で、子供たちが授業を進めていく中で、教師の出番を見極めることが 重要であり、児童をやる気にさせるような声かけをし、大事なことや押さえておき たいことを逃さないようにする必要がある。声かけをする際には、教師が子供の前 に立ってしまうと、子供同士の対話が進みづらくなってしまうため、後ろから見守 りつつ問い返しや補助発問をしていくことが効果的である。

振り返りは、教師があらかじめ本時のゴールを明確にもっておき、そこに子供たちが向かえるような支援の方法を考えていくことが大切である。振り返りの方法として、ICTを活用することで自らの変化に気付くことができるだけでなく、友達の考えも見やすくなるため、今後も活用していくとよい。

5 おわりに

昨年度より、山口県へき地・複式教育研究大会に向けて取り組むに当たり、研究主題を「子供の主体性を引き出す複式(少人数)指導」とし、見通しのもてる教材提示や ICT の活用場面を工夫し、「さくら小スタイル」を意識した授業づくりを進める中で、教師の見守り型支援を行い、児童の学び方を価値付け、対話を通した深い学びに導くことができるよう支援を行ってきました。今後は、深い学びに結び付けるための「問い返し」や教師の関わり方等をより精選することで、さくらっ子の生きる力につながるより主体的な学びを創り出していきたいと考えています。

最後に、本研究大会を滞りなく終えることができたのは、山口県教育委員会、山口市教育委員会、防府市教育委員会並びに各小中学校、山口県へき地教育振興会、防府地区へき地・複式教育振興会、そして、さくら小学校学校運営協議会、さくら小学校PTA、さらにはさくら小学校区の皆様の各方面に渡った御理解、御協力、御支援のお陰と心よりお礼申し上げます。

あとがき

新学習指導要領が全面実施され、どこの学校においても、ICTを効果的に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けて、社会に開かれた教育課程の編成、学校・家庭・地域の連携・協働による特色ある教育活動等が展開されています。

これら「令和の日本型学校教育」で求められている内容は、へき地・複式・小規模校において、学校課題を克服するために長年追究し育まれてきた教育実践に通じる部分が多く存在します。

本年度、県内においては、第52回山口県へき地・複式教育研究発表会を山口市立さくら小学校で開催いたしました。言葉を介して主体的に関わる子どもたちの姿を、深い学び合いの行われる授業を通して感じることができました。また、県内7地区では、それぞれの地域において、継続的な研究が活発に行われています。

それらの内容を集約し、実践研究紀要を本年度も発行する運びとなりました。本紀要は、へき地・ 複式・小規模校に勤務されている方々だけでなく、それ以外の学校に勤務されている皆様にとっ ても、参考となる取組が多く紹介されています。ぜひたくさんの方に手にとってもらい、それぞ れの学校・学級づくりや授業改善、心豊かな児童生徒の育成に役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが、本紀要に原稿をお寄せくださった各地区の皆様、編集に関わってくださった全ての皆様方に心から感謝申し上げます。

令和4年度 山口県へき地教育振興会 役員一覧

役	職		氏	名		所 属	職	名
会	長	伊	藤	和	貴	山口市役所	市	長
⊒ 11 /	\ =	藤	本	孝	治	山口市教育委員会	教育	長
副会	会長	兜	坂	弘	子	山口市立さくら小学校	校	長
E/→	*	兜	坂	弘	子	山口市立さくら小学校	校	長
監	查	Ξ	時	和	久	山口市教育委員会	指導	主事

[理事]

地	区		氏	名		所 属	職名
岩	玉	守	Щ	敏	晴	岩国市教育委員会	教育長
柳	井	西	元	良	治	柳井市教育委員会	教育長
周	南	厚	東	和	彦	周南市教育委員会	教育長
防	府	藤	本	孝	治	山口市教育委員会	教育長
厚	狭	南		順	子	美祢市教育委員会	教育長
下	関	児	玉	典	彦	下関市教育委員会	教育長
素	灰	能	野	祐	司	阿武町教育委員会	教育長

[研究委員]

中	野	達	史	阿武町立福賀小学校	校	長
---	---	---	---	-----------	---	---

〔評議員〕

E	氏 名		所	属	職	名	
吉	松	明	子	岩国市立修成	小学校	校	長
中	重	利	紀	岩国市教育委	員会	指導	主事
井	Ш	真差	美系	柳井市立日積	小学校	校	長
作	花	麗	美	柳井市教育委	員会	指導	主事
友	清	徳	栄	周南市立三丘	小学校	校	長
吉	永	知	宏	周南市教育委	員会	指導	主事
兜	坂	弘	子	山口市立さく	ら小学校	校	長
\equiv	時	和	久	山口市教育委	員会	指導	主事
岡	田	浩	典	美祢市立綾木	小学校	校	長
藤	本	儀	昭	美祢市教育委	員会	主	幹
野	﨑		誠	下関市立内日	小学校	校	長
横	Щ	優	次	下関市教育委	員会	指導	主事
中	野	達	史	阿武町立福賀	小学校	校	長
深	田	秀	郷	阿武町教育委	員会	指導	主事

[事務局]

Щ	本	晃	久	(一財)	山口県教育会	事務局長
柴	田	眞	弓	(一財)	山口県教育会	事務局

山口県へき地・複式教育研究大会 表彰のお知らせ

令和4年度は、第52回山口県へき地・複式教育研究大会を開催する等、へき地・複式教育の充実と進展に尽力されました山口市立さくら小学校に対し、山口県へき地教育振興会会長より表彰状と記念品の楯が贈られました。誠におめでとうございます。

令和4年11月18日 第52回山口県へき地・複式教育研究大会



山口市立さくら小学校のみなさん

令和4年度「へき地・複式教育実践研究紀要」

発 行 日 令和5年(2023年)2月1日

発 行 者 山口県へき地教育振興会

会 長 伊藤 和貴(山口市長)

編集責任者 兜坂 弘子(副会長)

発 行 所 山口県へき地教育振興会

山口市大手町2-18 (山口県教育会館内)

TEL 083-922-0383

FAX 083-922-5768

 $E \times - \mathcal{V}$ ykyouikuk@ruby.ocn.ne.jp

印刷所 株式会社 桜プリント社

山口市下小鯖3139-7